049
Sa25
049-Sa25ウ
1200500724467

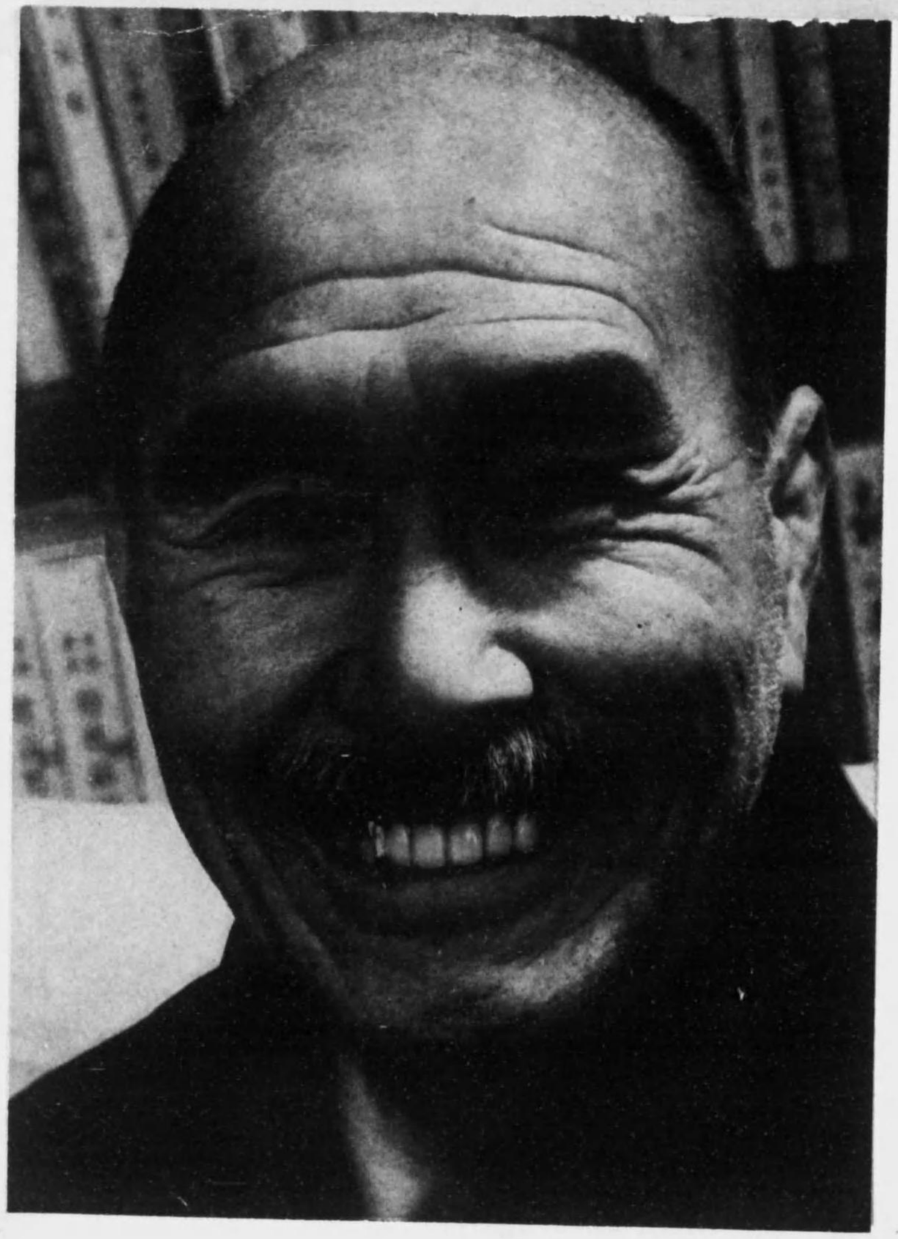
始

工7W19
049
SA256

懷袁堂 非心潤 於勝齋

唐書 珂那

東京大學圖書之印



著者近影

發行所
東京
土門拳

925
32

目次

第一編

國防國家體制に於ける統帥と政治……三
我が國體と「公」字……一六
大政翼賛體制下の思想文化……二三
翼賛會の性格……二九
大政翼賛運動中核人への希望……三八
母系指導と新體制……四〇
新體制の實施者は國民生活の內容を討究せよ……四二
翼賛と日獨伊同盟……四四
支那事變の處理とその指導精神の徹底……五八

第二編

銃後のことども……七九
包圍突破の國民活動……九二
婦人の翼賛……一〇三
銃後の婦人に念ず……一〇八
臣民道不變……一二四

第三編

記紀の精神……一三七
國民的教養……一四一
夢現往來……一四六
わが悲懷……一五四

あまのじやく……一六〇
信は力なり……一六五
底力……一六九
衣食住に遊ぶ日本……一七九
富士山……一八一
櫻……一八六
轍……一九〇

第四編

文藝人に寄す……一九五
新體制と天衣無縫の文藝……二〇六
日本世界學の樹立……二二四
我が最近の文學觀……二三一

現實と浪漫……一三五
文藝家の功績に報いよ……一三九
新日本文化建設の理念……一四三
新體制と短歌……一四四
眞の短歌人……一五一
在刑者の短歌……一六一
齋藤茂吉の愛國歌……一六八
歌人三浦守治博士……一九六
あとがき……二三七

わが悲懷

第一編

國防國家體制に於ける統帥と政治

從來國防なる語の概念は、廣狹の二つに分けられて居た。否、通俗的には多く狹義方面、即ち軍備それ自體が國防の如く思惟されて居たが、今は既に斯くの如き狹義國防を考ふるものは尠くなつた事と思ふ。夫は國家總力戰なる語、國家總動員なる語が現れ、現前に其事實を見せられたからである。若し言ひ得べくんば、軍が從來軍それのみが國防負擔者でありと解したら、その自負と自任は尊敬しても、それは畢竟僭越であり、國家がもし斯く解したら、それは誤解であり、無自覺であり、自己冒瀆でもあると思ふ。蓋し此の國家にあるものなら、總ての機關は勿論國民の一人も、極端に言へば、一木一草と雖も、消極的にせよ、積極的にせよ、その國の成立、發展に對する責務を持つべきものだからである。

國防の本義は實にその國を成立させ、その偉大圓滿な發展を遂げしむるに存する。それ

故、消極的には成立發展を否認する思想行動を防衛し、積極的にはかゝる障害を破碎するを要する。從つて又國威國權を維持し發展させることも國防の本義の命ずる所である。

觀念的な此の國防をその實あらしむるには、玆に之を擔保する實體を必要とする。是は國防の質と量とである。軍備は此の國防の一質であると同樣、內政の對象たる敎育も殖業も衞生保健も交通經濟も國防の質であり、外交も國防の質である。從つて此の質の夫々は質として同等の觀念を以て相對すべきもので、その質の何れを主とし他を從とすべきかは、環境如何によるのであらう。

此等諸質の量は大小高低によつて威力に差を生ずるが、對他的に此の威力の多大なるほど國防的擔保は强大なる譯である。此等の中どの質の威力を以て國防目的を達成させるかは、是れまた環境によつて決定されるであらう。

卽ち時に精神思想戰を以て、時に外交戰を以て、時に經濟戰を以て、又時に軍の直接行動を以て主體とするが、此の場合でも主體以外、從體の活動は常に之を必要とすることは

彼の軍の直接行動も、國家總力の支持なしには發展し得ぬことを見ても明かである。故に戰爭行爲を擔任する軍が此の行爲のみを以て國防完遂であると考ふるのは誤謬であり、又所謂銃後國家が、軍に一任して敢て共勵を缺く如きも亦誤謬である。

此の意味に於て、軍の戰地生活と國民の銃後生活とは、同等觀念の下に統制さるべきものである。實際に於ては各質活動の要求に應じ、輕重本末も生ずるので、その生活規整に若干の差異の生ずることも當然である。然し乍ら將來戰に於ては、軍が戰場に於て勝利を得たるに關らず、その國家は他の質の微力なるが爲めに崩壞する場合のあることを思へば、對敵する軍なるの故に、その生活活動を萬能的に認容し、他質の生活活動を國防擔保力を失はしむる迄に抑制してはならぬのである。玆に調整の要が生ずると共に、他の諸質は軍の生活活動を偉大圓滿にする精神實行の發露を必要とし、軍は亦他の諸質の生活活動を蹂躙せざる精神實行の發露を要する。形而下の規整と精神的の協調とは、此の場合國家全體より見ての國防完遂上要望されるのである。

嘗て我が國に於てさへ軍力を背景とせず、外交に依存して國際問題が解決される如き觀

愈や言論行動のあつたことは、現下世界の情勢から見たら滑稽に思ふものもあらう。對外的に軍の威力なき外交の如きは木刀を挾んだものの辭令であつて、斬るぞとまで威嚇しても他者は頭を下げぬのである。今日ではかゝる誤つた觀念外交はないであらう故、口先自慢の外交官と雖も國防國家體制を否認しまいし、軍力を背景とせぬ通商貿易がその發展性を阻害されることの現實を目擊した經濟人、資本主義者も亦國防國家體制を否認せぬと思ふ。自由主義教育者、國際主義教育者、嘗て桃太郎童話を呪ひ、神社佛閣の戰利記念物の撤去を叫んだ、そこらの教育者も、現下の世界情勢を見ては國防國家體制イデオロギーの教育を否認しまい。

だが然し、是を以て軍備萬能論者の勝利、軍至上主義だと考へてはならぬ。勿論そんな考を抱くものはあるまいが、幼稚な青少年をしてこんなことで軍人希望者を多からしむるやうな浮き調子的反映あらしめてはならぬ。

單に軍に就いて言へばその編制、裝備、教育訓練は國家が國防國家體制となつたからとて何等變轉する必要のないほど既に整備されて居る筈だ。それ故、國防國家體制に伴つて

變轉するのは他の諸質である。即ち主として教育、殖業、經濟、衞生、保健等の他の諸質がその體制を改變すべきであつて內政問題に關する事である。そしてこれ等を眞に恰適な希望體制たらしむるには、玆に軍の統制、裝備、教育、訓練及統帥の理解を必要とする。此の理解なき國防國家體制は形に於て出來上つても、その運營の場合に實力を發揮し得ぬことになる。

玆に大問題が存在する。それは、軍の機密事項と軍の統帥權とに關することである。軍の兵力量決定編制裝備は殊に國の經濟力に關係し、此の經濟力を度外しては成立し難いと言つて、之を國內に漏らせば直に外國に知られると思はねばならぬ。從つて方法論的に重大な考慮を要する。教育訓練も亦、敵性國家を考慮に置くとすれば外交と照合せられねばならぬ。

統帥に就ては殊に重大な問題を有すると思ふ。

總理大臣は統帥の機微を知らずして、如何にして內政外交を之に從屬させ或は之と協力

させ得るか。國防國家體制も此の點に於て缺くるあれば最終目的達成に於て效果を發揚し得ぬとの議論は當然起ることである。それ故、此の問題は或る意味に於て國防國家體制に移るに於て解決さるべき第一の重要事項と言ひ得よう。

或る者は之を彼の「クラウゼヴイチ」の戰爭論から、或るものは之を一般政治學から、或るものは自己の理想論から今日迄種々の言說を立てて居る。

總理大臣は軍人がよいと言ふものがある。然し軍人でも統帥系統に無き限り、又法令の命ぜぬ限り、直接統帥權に關與出來ぬ。若しこの直接關與の爲めに軍人總理大臣などを認めるとなれば、統帥の純粹性は不知不識の間に混濁し、不徹底化する弊害も生じないと限らぬ。勿論之は人の問題にもよるが、却つて偏傾的な政治の實現とならぬとも限らぬ。軍人總理大臣の場合でも總理大臣はその職制の命ずる權限を軍人なるが故に逸脫せしめてはなるまい。またかゝる一方的な任用は國家の爲め必ずしも幸福とは言へぬ。唯總理大臣が軍人なる故軍の事に通曉して居ると言ふ點で政戰兩略の一致が期待される點は確かにあると言へる。

或る者は大本營の編制に總理大臣を加へよと言ふ。是は大本營の幕僚中に加へるのかどうするか不明だが、陸軍部、海軍部、內政部とし、その內政部の長官にでもと言ふのか又は總參謀長の下にでも置くと言ふのか。此の程度なら諮詢連絡機關として存在することで十分目的は達せられると思ふ。

或るものは最高國防會議を設けよと言ふ。然し是を設けても、直に統帥に關與することは大問題である。それはわが國體上、他の外國の國防會議の如く統帥發源機關とはなり得ぬからだ。我國の國體は　天皇が大元帥として軍隊を統帥さるべく、臣下に之を委すべきものでないからである。從つて大本營に代る國防會議なら畢竟、大本營の幕僚會議以上のものであり得ない。もし之を以て大本營との別個の存在としたなら、夫は、大元帥の諮詢機關たるに止めねばなるまい。之を大本營との交涉や連絡などをするものとしたら、それこそ統帥は澁滯するのみとならぬか、漏洩などはあるまいが、さうしたことも考へねばならぬ。又もし平時的に此の機關を設けたとしても、それは畢竟研究機關で戰時の統帥機關に移行させ得ると直に考へ得ぬことである。殊にかゝる機關の決議が、大元帥陛下に强

要する如きことあつては、それは國體にまで影響する重大事である。

前述の如き戰時の諮詢機關に止めるなら、何もそんな大組織で、大看板を掲げなくとも濟むことである。必要に於て、大元帥陛下が必要の事項を御諮詢になればよいと思ふ。

最後の問題として政治部門と大本營との連絡會議的のものである。是は當然のことであらうし、是で充分目的を達し得る筈である。是で出來ぬのは、人的關係である。虛心坦懷誠意奉公に燃える人である以上輕重本末は定まつて居る場合である。國家の存亡を賭する場合だ。摩擦など生ずるのは互の駈引などあるからではないか。自己を沒却した國家の公事に左樣なことを考へるさへ氣持が惡い。

支那事變の場合、これがどう運營されたか、私は知らぬ。相剋や摩擦があつたと言ひ度くない。然し國家一體觀に立つ政治部門、外交部門と軍部とが歸結を異にして統帥の徹底出來よう筈がない。お互に他を無視して國家の實力と生活とに消化せざる軍の統帥などが大元帥陛下の統帥にありよう筈がない。もし左樣なことが誤れる認識にせよ、存在せりと言はれたら夫は軍事統帥部は大元帥陛下に對し奉つて申し譯なきこととして研究もし、反

省もあるべきだ。近衞公は如何なる點で今回此の統帥と內外政の問題とを解決せんとしたのであらう。

それが新國防國家體制樹立の立場からなら、私は何も言はぬが、從來かゝる處に癌があつた如き印象は人に抱かせ度くない。

若し是があつたとしたら制度の不備もあらうが恐らく人の罪であらう。人の罪としたら特に將來當時者に反省して貰はねばならぬ。

私は敢て政治部門及軍部の當時者に言ふ。統帥と政治と言つても、政治部門の知るを要するのは、方法論に屬する統帥ではなく、その大綱的な方面でよく、如何に政治的に步調を合すべきかの自己擔任方面に關することに止まるであらう。然し人間は、動もすれば知らでもよいことを知りたがる。此の事まで知らされぬのに不滿を感じてはなるまい。統帥方面の軍は、軍獨自に內政も外交も研究し、或る認識信念は當然あるべきだが、よしそれは有つても、此の方面の擔任者の意見は傾聽すべきである。恐らく、然し統帥部からは內政外交に就いて注文する場合の方が多いであらう。この事はその手段方法によつては感情

問題を惹起する。横暴、獨善などと非難の起るのはここからであると思ふ。かうした事は大いに反省さるべきである。つまらぬことが國家の大事に影響することは、彼の日露戰當時の露國及露軍の内部に見てもわかる。結局は總ての方面で分裂と混濁とを生じ、不徹底、不尖鋭となるばかりだ。そして累を國家國民に及ぼす。當事者が當事者として生きて居るのではないことを考へて欲しい。

私は然し重大なことをまだ述べて居らぬ。それは此の問題を動もすれば外國の例などを以て律せんとするものがあるが、我が國立法の基礎はあくまで國體に置くことで、政治と統帥との問題もまた然るものだ。それ故直に國體の異なる外國の例を以てすることは出來ぬ。天皇は政治を總攬せられ、又大元帥として軍を統帥せられる。畢竟輔弼機關であるものの間に相剋や摩擦を起し、そして政治部門がどうの統帥部門がどうのと言ふことの如何に恐懼すべきことであるかを靜かに考へて欲しい。重ねて言ふ、政治と統帥關係とが圓滿ならずと言ふことの何を意味するかの點である。當事者はかくあらしめて、自己を省みす

かく放言することを誡めねばならぬ。殊にかゝる場合の反省は鼻息の荒い方に要求される。私は敢て何れの鼻息が荒くあり又荒くなり易いかを言はぬ、唯だ此の點に就いて過去に鑑みて欲しい。兎に角眞劍なものほど熱し且つ荒くなり易いものだ。

統帥と政治の關係も、將來は從來より圓滿に行くと思ふ。それは國防國家體制の確立によつて、各部門のイデオロギーが同一となるからだ。從來、我政治外交に眞のイデオロギーが存しなかつた。從つて、時の情勢にもよつたが、動もすれば、その當事者のイデオロギーに指導された。それさへ甚だ不明なもので、一貫徹底した國家のイデオロギーの指導ではなかつた。是は國家的にも不幸であり、爲政者、統帥者にも不幸であつた。國防國家體制は必ず魂を要する。即ちイデオロギーが決定され、指導精神、指導原理も今より明瞭に示されるであらう。從つて各部門、各組織の活動も統制され、步調も揃ふであらう。私は斯くなるを信じ、斯くなるべく期待する。

斯くなる事によつて軍の活動も政治活動も活潑となり、威力を發揮するであらう。世間

動もすれば從來政治外交は軍によつて曳きずられた如き聲を聞かされた。或るイデオロギーを得た軍活動が威力を現した事は當然で、或はさうした認識が產れたのかも知れぬ。筆者さへ、國家の現狀打破は軍の力による外ないと考へて行動し、縲紲の憂目に遭つた。軍も或は指導者的な觀念があつたとしたら、それが自ら外に現れて、種々の風評を產む原因となつたのかも知れぬ。然しそれはもう過去に屬する。將來は各部門に優越感の發露的なものがあつてはならぬ。政黨全盛時代に彼の優越感を露はに見せられて憤慨し呪詛したのは、筆者のみではあるまい。優越感の振舞ひ、その役德的な行動こそ國防國家體制の渾然たる一體を破壞するものであり、イデオロギーに權化せざる機關、個人の存在は此の體制の運營を薄弱不徹底ならしむるものである。各機關、各個人が眞にイデオロギーの權化として立たば、人の私的感情は公事の場合自ら消滅する。

我國には上に　天皇が在ます。下にムツソリーニは要らぬ。要るものは透徹したイデオロギーである。集團が個人が、イデオロギーに歸一し之が權化となれば、內閣は私の閣僚なく、總理大臣は政治の最高機關であつて、個人でない個人である。從つて內閣の一體觀

が成立する。內部に各相の支離が生ずる筈がない。生ずるのは個人の自覺の不足の爲めだ。統帥部と政治部とに就いても同じである。一體觀に立つた、職任の分擔であらねばならぬ。組織や制度の不備缺陷は常に何處にも存在する。然し是等のものは一體觀の指導の下に消化されるものだ。相剋摩擦の惱などになるのは、相互の一體觀が足らぬからだ。私があるからだ。

我が國體精神を個人が把握し得たら、吾人の前に提示された內閣の不統一や、軍部政治部關係の或る種の相剋は將來最早現れぬ筈だ。筆者は是を希望する。そして之が爲めに速かにイデオロギーの確立を望み、之を個人及組織體に與へ、新國家體制を整備せんことを要望するものである。（昭和十五年九月）

我が國體と「公」字

「公」といふ文字、一字であるが、これを眞解すると否とは、我國體にまで影響すると思つた。おほげさな物言ひのやうだが決してさうでない。

試みに支那流の解釋をして見ると公は「ハ」に從ひ「ム」に從ふ。「ハ」は背となり「ム」は私なり、故に私に背く事を言ふ。公安、公有、公益、公園、公海、公開、公共、公會、公言、公私、公人、公衆、公職、公德、公賣、公法、公判、公布、公民、公明、公論等等算へ來れば限りもない。

公安は公共の安寧、社會の無事安らかなる事と解し、公益は社會公衆の利益などと解し、公海は何處の國にも屬せざる海とし、公開は公衆の傍聽觀覽を許し、祕密の反對とし、公共は公衆共同とし、史記、張釋之傳に「法者天子師與天下公共也」とある。

公會は公衆のよりあひとし、公言は公然と發表して言ふ聲明とか明言とかの意とされ、公人は國家又は公共團體の機關としての資格上よりいふ人で、私人・個人の反對とされ、公衆は社會一般の人々、民衆などと解し、公職は、公共事務を處理する職で、廣義には官吏を含むも狹義には官吏以外の公吏又議員などを言ひ、公德は社會公衆の爲にする德と解され、公賣は、納稅を怠り、又は債務を果さざる者の財產を差押へて、公衆にせり賣する處分を言ひ、公民は、或る年限市町村に住し地租又は直接國稅規定額を納むる規定年齡以上の男子だと言ふ。

以上の說明でも解るが、特に法律上の語は日本の國體から見れば甚だ不都合と思はれるものがある、これは我國の法律が外國のそれに學び、用語も亦外國のそれを譯したによると思ふ。何が不都合かはまだ十分に說明するを要すると思ふが、暫く之を措いて、次に我國の「おほやけ」に就いて調べて見よう。蓋し公は「おほやけ」と訓ずる場合が多いからである。

「おほやけ」は公官、大宅の義にして、朝廷、政府を言ひ、「おほやけ」の固めとなり天下

をたすくるとか、「おほやけ」の宮仕などと言ひ、又、「天下の稱」とあつて、「おほやけ」の御氣色悪しかりけり、などと用ゐられて居る。勿論「おほやけ」には私ならぬ事の意もあるが、「おほやけ」ごとは公事とよみ、禁中の政事節會などを稱し、「おほやけざた」（公沙汰）は表立ちて政府の取行ひとなることで、公判の如きものであり、「おほやけびと」は官人、大宮人を言つて居る。今の法律の公人とは違ふ。

即ち支那流、外國流の「公」は横に廣がるものが多く、縱に廣がるものが少い。日本の「おほやけ」は縱に廣がるものが多く横に廣がるものが少い。こんなおほざつぱないひ方はよくないかもしれぬが、個人主義人の考へ、日本主義人の考へと「おほやけ」に就いて異なるものあることは、大體に受け取れると思ふ。

義勇奉公の公を横にひろげ、滅私奉公の公を横にひろげ「公」と「共」「衆」と相通ずるの故を以て義勇奉共、義勇奉衆、滅私奉共、滅私奉衆、としたらどんなことになるであらう。即ち社會主義、共産主義、民主主義的となつて仕舞ふことがないか。それ故こゝの

「公」は縱にひろげ、之を　上御一人にまで及ぶ公としてこそ　天皇中心となり、義勇君國に奉じ、滅私君國に奉ずることになると思ふ。蓋し日本の國體は君と國とは一體なるが故に結局奉公の精神は　天皇に忠節を盡すことであらう。然らざれば此の滅私奉公を滅私奉共とし、或る主義者が新體制は「赤だ」と宣傳した如く利用し得る。

公益優先にしても、公衆の利益を先にすると解してよいか、君國の利益を先にすると解すべきか、若し横に人民のみを考へたら、どんなことになるであらう。人民戰線的にならざるを得ないではないか。

外國とても公を縱に廣げれば、國家に及び、社會に及ぶであらう。然し果して日本の如く、それ以上に及ぶであらうか。

もし及ばぬとすれば、此の觀念は、我國體に容れられぬものであることは明かである。

だが日本にも「萬機公論に決す」と申された御言葉がある。重大な御言葉である。あの御言葉を國民が振り廻したらどうであらう。

萬機を御總攬あそばす　天皇があゝ仰せられる處に日本の國體があり、萬事　天皇を中心と國民の言ふ所に國體がある。蓋し日本の國體は　天皇、國土、國民は歸一一體で皆天皇に歸一し奉るからである。もしあの御言葉のそれを國民が實行する如く考へたら、恐れ多いが嘗ての如く天皇機關説さへ生じ兼ねない。

日本が今使用して居る「公」字には個人主義、民主々義國家の理念を持つた支那の公字や、西洋の語に宛てた譯字が多く、玆に混亂し雜然と使用されて居る。

故に若し「公」字と個人主義、民主主義國家の理念の公字として此の理念を徹底したら、此の公字一字でも我國體を混濁させるに至るであらう。

幸に我が國家は一體國家である。此の一體觀では横のみの見方は成立せず、縱横渾然たる見方が成立する故に、私は在つて私なく、彼我の區別あつて彼我の區別はない。

夫故に公字は國家に擴がりを持つて來る。この國家はやがて　天皇と一體であるが故に公字は實に尊嚴であり、重大である。從つてかく擴がらぬ場合にも同樣公字を使用することは、結局「おほやけ」觀念の嚴肅さを害することになる。

日本現下の法律は、この「おほやけ」觀を稀薄にし、日本人の道德心を消衰せしむるが如き感を與へぬでもない。

論より證據、官人、公人卽ち官職公職の人の職責感が稀薄で、個人よりこれらの人が信賴出來なかつたり、私會より公會の方がいいかげんであつたり、個體より公體の方が腐敗したりして、嘗ての日本、近くは彼の封建時代のそれより、責任に於て道德に於て劣つて居る客觀を與へるものが多いではないか。

もともと「おほやけ」に公字を宛てたことがよいか惡いかも問題であらうが、法律などが、いとも無雜作に、公字を使用したことも、日本の傳統精神上考慮を要するであらう。

然し現下の如く公字が濫用され、「おほやけ」觀が混亂されて居る事實の前に、吾々は、個人主義人、社會主義人、共產主義人、民主主義人に、都合よき解釋を與へてはなるまい。彼等は嘗てもかゝる法規を巧に利用し、巧にその主義の辯證とした。今國家が新體制となつて諸種の施設が行はれ、又將來益々行はれるであらう。彼等は、その施設に彼等の主義的理念を以て投入するを企て、又之を實證として自己の主義の權威を提示するに努めるで

あらう。「我が國體と公字」なる一文、杞憂に過ぎずとならば幸である。

大政翼賛體制下の思想文化

國邊にいくつか殘る限られし地球の上に日本もある

地球には限りがある。その地球上に今列強が生存を爭つて居る。歐洲は言ふに及ばぬ、老大國英が沒落に瀕して正に獨伊中心の歐洲が建設されんとし、抗爭は、此の獨伊中心國家と米國中心國家との間に擴がりつゝあるのだ。

大東亞に於ては我が日本が中心となつて、滿支と結び新秩序國群を建設せんとし、支那に於ける、英米支持の蔣政權を排除して、八紘一宇の大理想、世界平和の中核固成に奮鬪をつゞけて居る。そして此の奮鬪は當然の過程として英米との抗爭に移らむとしてゐる。

茲で吾々は更に考へねばならぬ。

地球の上に殘らふ國をかぞへ居て思ひはいたる次の戰爭に

殘る國、それは獨逸中心國家、米國中心國家、日本中心國家、かうかぞへて來た時、八紘一宇の大理想國日本は、世界救濟の中核として、どうしても存在するを要するのだ。中核日本、此の中核がしつかり成立し發展せずしては、世界救濟などは思ひもよらぬ事である。

吾々は此の日本の國民なのだ。國滅びて國民なし、吾々國民はかるが故に絶對に國家を成立させ、その偉大圓滿な發展を遂げしめねばならぬのだ。

茲に日本は獨伊と結び、先づ大東亞の新秩序を建設し、世界の秩序を確立すべく敢へて起つたのだ。

此の大抱負、大任完遂の爲め中核日本は打つて一團の熱鐵となるを要する。之が新體制理念の根本である。

打つて一團となる。ここに先づ精神方面の純一無雜なる要求が生れる。茲に思想主義の

一元的徹底を絶對に必要とする。是が爲めには吾人は日本の國體に鑑み、肇國の精神に一體化し、外來の思想を驅除するを要する。

日本の國體は上下左右悉く歸一關係を持つた一體觀より成立して居る。故に此の一體觀に反する個人主義、自由主義、民主々義、共産主義の混入を許さぬのだ。是等の主義を持つ一人があつても、國家の成立と、その偉大圓滿な發展は障害される。

現下の危局は萬民翼賛を要求する。一人の離脱背反を許さぬのだ。從つて各個人は吾こそ此の翼賛人であるとの矜恃を以てその翼賛の實を現すべきであり、職域職能奉公の前に先づ此の混在を許さぬ思想主義を清算して起つべきである。然らずんば、渾身の汗、脂、血を注いで努力しても、その一滴さへ、國家を育成し得ぬのみか或は之を傷害するのだ。

此の事は新體制が高度國防國家體制であることからも言へる。國民には思想國防の責任がある。個人主義、自由主義、民主々義、共産主義は日本を傷害し、その成立を完全にしその發展を偉大になし得ぬ。それ故一人もが此の主義の把持を許さぬのだ。嘗ては此等の主義が日本を育成するものと考へて居たものも、今は斷然之を放棄しその愛國の至情を發

露する爲めに本然の國體觀より唯一存在を許す思想主義を把持するを要する。然らずんば日本の雄渾な抱負も大任も實現し得ぬばかりか日本の成立發展さへ疑はれるに至るのだ。國滅びて國民ありや、今は眞劍に考へねばならぬ時だ。吾人の生活に結びつけて考ふべき時だ。世界の海は狂瀾怒濤が逆捲いて居る。まごまごして居ると、我日本の大船さへどうなるかと言ふ秋だ。

荒海に艫梶そろはぬ船なしてわが皇國を漂はすべしや

從來文化と言ふ美名の下に我々に提供されたものも、今更に檢討すれば、それは國家をむしばみ、國民を墮落するに過ぎぬものの、ある事を認識しなければならぬ。國家の成立を害し、その發展を沮み、國民の精神を混濁しその肉體を消耗させるものを文化と認め得る筈がないのだ。よしそれが外國の文化でも、個人主義、自由主義、民主々義、共産主義文化では我國に無條件に取り容れてはならぬのだ。此の檢討なく、從來外國かぶれ又は外國模倣から、或は漫然たる人間享樂欲求から、その外貌の美光に魅惑されて、我國に取り容

れられたものが尠くない。彼の文化人と人も言ひ自分も信ずる人々に、眞の日本人たる思想に目醒めず、その言動が日本及日本人の爲めにならぬもののあることも、又文化施設と言はるるものが、等しく日本及日本人の爲めにならぬもののあることも、かかる無自覺無檢討から來たのだ。今迄はともかく、現在以後は最早これ有るを許されぬのだ。

その國家、その國民を遂に衰滅に導くものは、外貌光彩陸離、人の耳目を、その心情を喜ばせても、眞の文化と言ひ得ぬことは今更言ふまでもあるまい。

然し私は過去を追及する必要はないと思ふ。否、そんなことに停滯して居る餘裕はない。今は國家が既に荒海に乘り出して仕舞つて居る。

生くる途彼岸の他になしと決め大荒海に漕出けらずや
荒海の荒ぶる中に吾等漕ぎ艫梶そろはぬ船なすなゆめ

國家といふ大船の漕ぎ手は吾等なのだ。吾等國民なのだ。渺たる一人と思つてはならぬ。それが何處の職場にあらうと、どんな日陰にあらうと、又嘗て如何なる艫の漕ぎ方をした

者でも、今は擧船悉く同一の心、同一の調子で、同一方向に漕ぐを要するのだ。然らずんば船は彼岸に達し得ぬのみか、或は顚覆の憂目に逢ひ乘組員吾等悉く溺沒しなければならぬのだ。實に眞劍な場合なのだ。考へて居る時でなく行動しなければならぬのである。世界觀を持ち、そして國家觀を得、その國家觀から人生觀を把持する。然らば吾等の行動は熱を持つて潑剌と國家の方向に發展するであらう。私はかく信じかく期待するものである。

（昭和十六年一月）

翼賛會の性格

翼賛會改組問題が矢釜しくなつた。是は寧ろ當然のことである。明確な魂が示されず、漫然、徒らに雜多の人々を集めて老大な組織をなし、仕事の有無、要否に拘らず門戸を擴大して、種々の部門を設け、さて店開きをしてから、仕入れや、販路と議論して居る始末では、眞劍に、國家のことを考へる者には見るに堪へぬのだ。かかる國民生活を輕視した中央指導部に反し、地方では、早く既に先覺者によつて着々業績を擧げてゐ、浸徹した指導を期待して居る。かうした所では、期待外れ以上、失望し、信賴の念を薄くし、中には嘲笑さへ生れて居る。それのみか、中にはこれがある爲め、政府の政治精神が却つて混濁し、歪曲されぬかと心配して居るものもある。

實際、理念に一貫したものなくして、どうしてその指導が徹底しよう。眞に政府と一體でなくて、何で翼贊の實を擧げ得よう。改組は最早要否の論を超えて、絶對的に實行を要望されるものだ。

然し、だからと言つて今世間にある改組要求の聲は必ずしも正純なものとは思はれぬ。

黨人の中には嘗て、近衞公を黨首とした大政黨を結成し、既成勢力の維持を圖らうとしたが、之が近衞公によつて一蹴され、然らば、此の翼贊會に議會人を入れ、あはよくば之を乘取らんとした者もあつたが、是も思ふ壺にはまらず、今まごまごして居ると、彼等の地方的地盤は、翼贊會によつて崩壞に陷されるかも知れぬ情勢となつて來た。茲に彼等の改組が叫ばれ、そして猛烈な謀略が展開されるに至つた。

それに、現在の翼贊會内にも概念的な政治意識の持主も居り、又獨逸のナチスと我が翼贊會も同樣だと考へる者も居り、既成政黨時の如く、翼贊會は内閣の母體たるべきものの

如く考へるものもあり、中には此處で、彼等の政治力を發揮して、他日榮達の地盤を造らうなどと考へて居る如き客觀を與へるものもあつて、一體翼贊會は何處へ行くかの疑問を與へ、その行動を澁滯せしむる情勢となり、非常な意氣込を以て產れた翼贊會が、今は却つて氣合拔けの形に陷つて了つた。

然らば翼贊會は不必要かと言ふに、私は矢張り必要と思ふ。此の名稱の適否は別として、現在内外の情勢から見れば、高度國防國家體制の整備の上からも眞に一體國家の實を擧げる上からも、これあるを有利と信ずる。

夫なら翼贊會は如何なる性格に在るものかと言ふに、私の信ずる處では、之に大家族の母系指導の立場を與へたい。卽ち、本然の政治系統は父系に屬し、威と嚴とを理念とし、翼贊會系は愛と慈とによる指導を本性とすべきだと思ふ。從つて議會は父系會議、協力會議は母系會議である。

一家に父母があるが、此の父母は一體であり、母は父に歸一する。故に母は內助の位置に立ち、子女の躾を特に受持つ。母が父の政治に表面より建議し、之にその要望を强制したらどうなるか。それ故、母が死んで生きる融け込みを我が家族制度の本精神とする事を忘れてはなるまい。故に父の政治には母が融け込んで居るのを本然とする。翼贊會は政府に融け込んで居るべきである。然し乍ら此の父の政治を子女に對して徹底し、子女を一家に歸一させ、眞の子女たる實を具備させ、活動させる如く指導し、躾をなす職分に於て、翼贊會は母として儼存する。

母が不貞腐れて、父と抗爭し、摩擦し、和を缺くか、所謂、嬶天下となつたら一家はどうなる？　子女はどうなる？　母の指導力を强からしめ、その效果を大ならしむると言つて、威と嚴とを父同樣に振り廻し、强權を發動したら、子女はどうなる？　父に對する母の入智慧や、差出口を子女に見せたらどうなる？

それ故、翼贊會は父そのものの政治性、政治力を持つてはならぬ。どこまでも母そのも

のの政治性、政治力の範圍を出でぬ。問題は母の政治性、政治力と言ふことにある。

從來の政治なる概念は、國民生活から遊離し、政治權の發動或は政治行爲の特殊的なものにあつた。從つて、國民の一人一人に高度の國防性を持たせ、高度の國防的生活活動を發展させるが如き、大地を踏んだものではなかつた。

かう考へると翼贊會の性格、態度、行動ははつきりすると思ふし、日本の國體に從つた存在たり得ると思ふ。

翼贊會は公事團體であつて政黨であつてはならぬ。政黨となれば當然、內閣の母體的な立場に立ち、他の政黨と對立的となり、將來政策的に之等政黨との抗爭を惹起し、國論は統一を缺くに至るであらう。それ故翼贊會は政黨を超越した、國民總意の翼贊方法論的な存在である。幾多の政黨が假に他に出來ても、之等政黨と雖も翼贊を目的とする面に於ては此の翼贊會を培養し、推進し、よくその存在の意義と價値とを發揮せしむべきもので、

離背抗爭すべきものではあるまい。

翼贊會は嘗ての精動であつてはならぬと言ふものがある。その理由の一に精動には政治性がなかつた故、活動が徹底しなかつたと言ふ。私は、嘗ての精動に政治性が無かつたと斷ずることを拒むものである。精動の名稱は如何にも政治性のないやうに見えるが、精動の施設活動は、私の謂ふ政治性を持つて居た。國民の生活に消化融合して、國の政治を個人の活動に展開させて居た。その效果を擧げ得なかつたのは、組織が完成せぬからであつた。精動に政治性がなかつたと言ふ、その政治性は、既成政黨時代の所謂政治性概念であつて、國民生活から遊離したものである。そんなものは、翼贊會にも不必要である。地に着いた政治性なら精動にもあつたと見るべきである。

故に私は、翼贊會は舊精動の理念を組織の完備により國民運動に展開させ、國民に國の政治を、生活、活動に、體顯させるのでよいと思ふ。

從つて翼贊會に議會局など不用のやうな氣がする。實際に斯樣なものがあつても仕事がない筈だ。公事團體たる中の一局が、議會と言ふ國の機關と何をすると言ふのか。翼贊會は常に副體の系統によつて活動すべく、內助の精神に從ふべきものである。

翼贊會には議會人の居る必要がない。此の人々は父系會議で全力を注ぐべく、母系會議は此の方面の別の人々に全力を注がすがよい。父母の仕事を混亂するのはよくない。又議會人はその會議に參加せぬ他の平常時は、從來一部の人の如く政治ゴロ的の生活をやめて、各々職業人として、活動すべく、あの遊び人的な妙な存在から消え失すべきだと思ふ。

議會人は翼贊會に入らぬ方がよい。かくして人材を議會と翼贊會とに集め、國民中の有爲の者を二倍の數となし得る。一人二職より一人一職で充分働かす方がよい。兩者が抗爭する如きは臣道を解せず、一體觀に缺け、國家主義でなく個人主義的な考へがあるによる。性格、組織、系統、職域が判然明確なれば混亂は來さない筈だ。

翼賛會が多くの經費を國家から貰ふことは翼賛の主旨に反する。翼賛會は奉公の精神を最も高く昂揚すべきものだ。國民は國家から經費を貰つて翼賛の生活活動はせぬ。否却つて稅金を出し、會費を出し、組合費を出して居る。國民が眞に翼賛の生活活動が出來、之が完全なら翼賛會などの指導機關は不要である。此の事を考へたら經費を最少にして國民の負擔を此の存在によつて多からしめてはなるまい。

現翼賛會がどうしてあんな尨大な組織を採つたか私には解せぬ。經費の上からも仕事の範圍からも、もつと縮小すべきである。

何れにしても翼賛會は性格をもつと明瞭にし、確乎たる立場を與へ、職域を誤らず、行動に熱と力との生ずる如くなければなるまい。

私は現翼賛會が成立した時、その人的要素を見て考へ、理念の明確ならざるに希望を失ひ、國民の期待に副はざるなきかを憂へた。

と言つて現下内外の情勢からは、最良の方法論として、翼賛會の如きものの存在することの必要を認めるので、之を支持しつゝ、只管純化を希望して來た。今やその希望の實現する時が來た。

最後に、あの大屋臺を縮小するは困難ではあるまいが、人の問題に於ては愼重の詮議を要すると思ふ。

一旦呼び集めて置いてその中から、某某を出て貰ふと言ふことは或はその人に傷をつけぬとも限らぬ。

翼賛會は皇國の爲の緣の下の力持ちに甘んずる人によつて構成されねばならぬ。

政治的野望の持ち主、出世榮達の念願人、職場稼ぎ人は有能と雖も之を拒否するがよいであらう。（昭和十六年四月）

大政翼賛運動中核人への希望

翼賛運動は身自らの新體制確立から始まる。下、實踐網の個々は勿論だが、特に私の希望するのは、指導中樞部に在る人々それ自體の新體制確立を立證し行爲し、爾他の國民に信じ敬し仰がしむる客觀を湧かしむることである。由來指導部等の上位の者は、高處に在つて訓示し、要求はすれど自己はその役人故、之を服行する者に非ざる如き觀を與へて居た。これは勿論、不心得千萬のことであつて、自己の發する訓示要求は卽ち自己にも又訓示し、要求するものであることを充分に認識し、行爲して貰ひたい。

そこで私は言ふ。過去は問はずと言つてもこの中核體内の人々には嘗て、その言説に、その行爲に、その生活に、個人主義、自由主義、民主主義人と國民の認定を受けて居たものが少くない。そして又嘗て此の新體制を要望した者を憎悪排撃した人さへ無きにあらずだ。此の人々が今、國民に向つて個人主義を捨てよ、自由主義を去れ、民主主義を葬れ、速に新體制になれ、と言はねばならぬのだ。衷心どんな氣持がするであらう。

此の運動は理窟以上の熱を要する。かうした人々に熱を望まねばならぬことは、氣の毒にも思ふ。だが、時勢だ、方便だ、便乘だ、轉向だ、自己の生きる爲めだと言つた解説などや批判などを挾む餘裕を國民に與へてはならぬ。此の冷眼視、微苦笑を國民より買つては、その言説も行爲も權威を現すまい。否、時にはその存在が打ち壞しにもなる。私は此の點に同情と危慮とを持つ。そこで特に希望する。此等の人々は國民の認識を改めさすに足るだけ眞に自ら自己の革新を行ひ、自己の新體制を整備し、行爲して欲しい。そして何よりも自ら過去の非なりし事とその轉向とを國民に宣誓提示して欲しい。此の公明にして國家本位の堂々たる態度こそ國民を感激させ、此の運動を邁進させるものと信ずる。爲し難きことを敢へて望むが故に、言ひ難きことを敢へて言ふのである。之を諒せられよ。

（昭和十五年十一月）

母系指導と新體制

新體制はみやうによつては、父系政治と、母系指導と一體となつて國民の觀念、行動を國家に結束させる體制といひうる。父系政治は嚴、威、母系指導は愛、慈がその主義となる。これを一家に例へれば、父の命令、母の躾で、母は子に能く父の心を理解させ、その柔かく溫かき愛で、父の求むるものを子に實現させ、また子の心持を聞いてときに父に告げ、父を輔けて一家の成立及び圓滿な發展を遂げしめる。この母の役割をするものが新體制の指導機關である。かくみるときに新體制下の婦人、殊に實踐網における婦人の立場が明かになると思ふ。『婦人よ家庭に歸れ』との意味の重大さも解る。

新體制の指導部が愛、慈をもつてする躾の使命を忘れ、威令を誤用したら二重政治が生れ、婦人を輕視したら生活に消化された奉公は生れ難くなる。從つてまた婦人がこの新體

制理念を體得しなければ形態の美は整つても國家が希望する實質の充實を招來し難い。私はこの意味で婦人に賴むところが甚だ大なるものである。（昭和十五年十二月）

新體制の實施者は國民生活の内容を討究せよ

國家觀念の缺如から國民を救へ

私は二・二六事件に連坐して獄中生活をして來たのであるが、あの事件は確に呪ふべき國家の大不祥事であつたらう。併しながら五・一五事件、二・二六事件に參加した連中は何を要望したか。即ち今日吾々の眼前に現れてゐる新體制を要望したのであつて、先日の官報・週報にも、今度の新體制運動は五・一五事件、二・二六事件によつて起つたといふやうな意味のことが書かれてあることによつても分るであらう。洵に時世は變るものである。私は國民をこのやうなどん底に陷れる前にこの運動がしたかつたのである。

そこで、私の考へる新體制の行き方の原則は、國民の總力を結集して國家の威力發揮に

役立たしめることにおいては問題はない。これを國防國家體制といふ名にしていはうが、萬民翼賛體制といふ名にしていはうが、結局は經濟、産業、教育、文化などを一體としこれを個人に發揮させ、その發揮した力を綜合して行くのである。

そこで今度の新體制を概括すると、つまり父系政治と母系指導といふ二つの性質があつて、兩々相俟つて子供を思ふ方向に育て上げるものであると思ふが、その中、特に大切な母系指導といふものが今度の新體制において施設される譯である。例へば指導部がお母さん本部であり、お母さん會議に協力會議が入る。この系統から實踐網に到着するのであつて、お母さんの指導の理念は慈愛で行くべきであり、この慈愛の觀念が今度の指導から抜けるならば、これは二重政治になつてしまふのであつて、かうなつては新體制は意味をなさなくなつてしまふ。今度は何處までも母系指導が本當に透徹して行かなければいけない。

母系指導が慈愛を主とすることになると、お父さんの方の政治は威嚴を主とするものであつて、これは國民に無理押付けをして、もし肯かなければ强權發動によつて處罰して行くのである。お母さんの方は無理押付けをしてはいけない。國民の納得理解といふものを

招來しなければいけない、父親が嚴格に過ぎる家庭に不良少年がよく出るやうに、炭屋の小僧、呉服屋の丁稚までが「警察が怖くて商賣が出來ない」と、今まで泥棒でなければ使はなかつたやうな言葉を公然といふやうになつた。この道德の廢頽、國家觀念の缺如より國民を救はなければならない。現下のわが國においては、母系指導は絶對に必要缺くべからざるものである。

滅私奉公よりは育私奉公だ

次に新體制は全體主義であつてはならない——世間ではドイツは全體主義國家である。イタリーも全體主義國家である。故に日本も新體制は全體主義國家になつたのであるといふものもあるが以ての外である。日本は全體主義ではない、肇國以來渾然一體の國家である。天皇、國土、國民歸一不二の國家である。個は個々として存在し個が分岐的に集結した全體主義國ではない。私は個人主義を認めない。新體制において全體主義國家の眞似をする必要は斷じてない。

然らば個といふものはどうなるか。私といふものは亡んでしまふのか——私は或る時、

今度の新體制もいゝけれども個を無視して、個の生活はどうなるかといふ質問を受けたことがあるが、個を生かしてこそ初めて一體といふものゝ發展を期し得るのだから、新體制は上述の父系政治と母系指導の兩方をもつて個を生かして行くのである。

かく論じて來ると、國民の生活を最小限に擔保するといふやうなことは以ての外で、觀念的にかういふ言葉を使つてはいけない。最大限に擔保するといふことでなければならない。最大限イクオール最小限であるかも知れないけれども、國民精神を昂揚し、自意識的にその發展を求めるのには明朗性を持つ必要がある。それ故に政府としては最大限といふことを國民に約束し要求しなければいけないのであつて、當局自ら最小限などといふことは戒むべきことである。

滅私奉公といふ言葉もいけない。滅私奉公とは、個人主義國家の言葉である。育私奉公——私を育てゝ公に奉じて行くものでなければならない。個人主義でない段階における個は、最もその存在を尊び、その自由を發揮させなければ全體は發展しないのであつて、個の權利を忘却する時において新體制は苛斂誅求になる。下手すると共産主義になるかも知

れない。

最小限の生活、即ち最大限の生活になるかも知れないけれども、こゝに重大な問題は萬民翼賛といふことについて失業的なものを直に救濟しなければ翼賛觀念等は到底起つて來ないかも知れない。

新體制の行くべき方向は東亞共榮圏の確立にありといつても、この内部に脆弱性を保持させては意味をなさない。換言すれば、東亞共榮圏獲得のために中核を固成することなのである。こゝにおいて國家は國民に萬民翼賛を要求すると同時に、國民の一人をも失業者あらしめない政策を完遂せしめなければならない。といふことは國民の仕事が直ぐ國家の仕事である。故に國民に仕事なからしむることは國家の仕事が充實してゐないといふことになつて來る。他の幾多の理由があつても生きて行くといふことが大義名分として主張されるやうな世の中になつて來たのである。誤解があるといけないけれども、共榮圏の獲得は、國家が生きて行く權利の主張であつて、國家がこの權利を主張することは國民に對する責任から來てゐるのである。從つて重大な問題は、共榮圏を獲得するために、或程度の

缺乏に耐えて行くことは勿論必要ではあるが、餘りにどん底に落してしまへばその大目的達成に個が消滅して行くことになる。この二つの矛盾、撞着を如何に調理して行くかといふことが、新體制における大いなる研究題目でなければならないし、またそれを適當にして行くことが重大なる施設でなければならない。

理想は可にしても現實は追從せず

精神的昂揚といふことは絶對的のものであるけれども、生きてゐる人間に對して生きる道を與へることを忘れての精神昂揚はない譯である。故に大體において、新體制は國民が非常に希望してをり、何とか生活が打開しはせぬかといふ大きな期待を持たされてゐるといふことを忘れては、國民を失望落膽せしめ、思ふ通りの權威ある父系政治も、慈愛の指導も共に受容れなくなる虞があると思ふ。この時において、吾々は最も不幸なる場合を想像することになる。

若しこの點を忘れるやうなことになり、緩急を誤れば理想は可にして現實はこれに追從しなくなるのであつて、從來の精動にしても或は新體制の理念にしても、政治或は指導と

いふやうな上から流れて行く力が本位であり、下から力を湧かせて上に送つて來るやうな施設がなかつたことは爭へない事實であると思ふ。何故下から逆る力が上に出て來なかつたかといふ點について、新體制の實施者はもつと國民生活の內容を討究する必要がありはせぬか。このことが下意上達といふ言葉の中に含まれてゐるならば非常に結構なことに相違ないけれども、寧ろ下意が達することを希望するよりも、下の方からは何もいふことのない位、上の方から下のものに卽した精神と施設とをもつて新體制を運用して、初めて效果的なものになるのではあるまいか。

これが巧く行はれない時に一番迷惑するものは實踐網である。町會、隣組常會等であつて、指導部、政府からいろ〳〵の報告書ばかり出させられ、今までの遣方を見るとまるで調査機關のやうなことをやつてゐるのである。村役場に行つて見ると村長も事務員も統計ばかりやつてゐて事務をやることが出來ない。下を治めなければならないものが、お上の報告書ばかり書いてゐるやうな新體制が出來たら、新體制はおしまひである。

そこで具體的に政策はどう改めて欲しいといふ私の希望を述べて見ると、第一の問題は

經濟政策であつて、これが統制的に現れることは當然であると思はれるが、統制的に現れることになると、觀念は今までと同じかも知れないけれども、今までのは實行において不徹底と混亂が存在し、これがために國民各層に亘つて生活の差が著るしく出來てしまつたので、その差を除くこと。卽ち近衞總理のいはれたやうに、一人の暖衣飽食を許さず、一人の餓ゆるものあらしめないといふことが緊要な問題になつて來るであらう。

假に中小工業者についていへば、大資本が小資本壓迫を政府の力によつて排除し、大資本者の資本を小資本者に分散する經營法及び小資本者の集結によつて職業的對立を減少して、新しき大中資本の運用によつて利益を配分するといふやうなことを直に實行させなければ、失業者を救濟しその增加を防ぐことは出來ないと思ふ。

これに踵いでの問題は職業的な政策、生活面に對する統制であつて、これは現在においても既にその方向に動いてゐるけれども、實際においては非常に不徹底なものであつて、生活資源を得るのに上流階級と下流貧困者との間に差がないとはいへないのであるが、これは貧富、地位、階級に拘らず、差があつては政府の存在價値といふものは乏しいものであ

る。この點において考慮と施設を要するのであるが、たゞ國民に眞の理解を與へ、その理解の下に、この時局を乘切るために眞に忍ばねばならぬ限度を誤りなく認識させて、さうして國家に協力させることが、何れの場合においても必要であつて、これが不徹底なために生ずる國民の私利私欲からの不平不滿が從來可成りあつた。これは國家のために不幸な部面であり、しかもそれが如何なる理由か國民に納得するまで說明されてゐないのであるから、この徹底方法については新體制に期待するものが多いのではないかと思ふ。

指導部の一員は即ち國民の一人なり

次に今度出來た指導部、その上層部の人々に要望したいことは、これらの人々は國家に無報酬で奉公するといふ考になつて貰ひたい。つまり職場觀念、榮達觀念を放棄し、一身を捧げ骨身を碎いて、無報酬で働く下部組織の人々に範を示すといふ觀念になつて貰ひたい。嘗ては內閣の諸公及代議士諸君から、高い俸給および歲費を取上げたら、幾人希望者があるかといふことまでいつたことがあるが、つまり今までのさうした人が受けた非難の一部には確にさういふ榮達欲、職場欲が客觀されたのではないか。だから、この客觀的な

ものを除去して各々至誠を擂んづることにならなければ、國民の認識を誤らしめるであらうと思ふ。新しく設けられる新體制指導部の人達は全然無報酬であつては官吏の古手、會社の重役以外の人々は生活が出來ないことになるから、報酬は受けるにしても率先自ら淸貧に甘んずるの覺悟をし、またこれを國民に認識させるだけの實がなければいけない。

新體制を眞に效果あらしめるのには、結局これが國民の行動に現れ、この行動が精神的に一體となつて、死なば諸共觀念が湧かなければならないのであつて、その時に從來のやうな認識を國民に與へてゐたのでは、國民に死なば諸共觀念を湧き起させ得ないであらう。從つて行動の熱が發揮されない。この點については特に官公吏にも希望したい。

さうしてこの人達自身やはり實踐網の一人であることを忘れてはならない、出でては指導部の一人であるけれども、入つては國民の一人であり實踐網の一人であることを忘れてはなるまい。從來この觀念が所謂官僚に缺けてゐた爲に訓示政治或は强權政治、若しくは官僚擁護政治といふやうな觀念を與へてゐたのであつて、これを除去する方法は最早明かである。卽ち新體制の效力發揮はその源泉において何をなすべきか、十分滲透性を强めて

これを實行に現さしめる上において、その職についたものは非常な考慮を要するのではないか、舊體制人がその地位にあるのであるから、ます〳〵かういふことを強調せざるを得ないのである。

次に統帥と政治との問題であるが、統帥と政治といふものは、いふまでもなく　陛下が親裁せられてをるものであり、これが巧く行つてゐるとかゐないとかいふことは臣下がいふべきことではない、といふことはその人自身に責任があるのであつて、何故に己の輔弼が足りなかつたかといふことを三省すべきものである。つまり下の方が一體になつてゐないからこそであつて、要は人間の問題である。人間が政治部面及統帥部面において眞に理解してゐれば左様な實際は現れるはずがない。從つて新體制はこの考慮をすることが必要である。

もう一つ、一國一黨になれば幕府的存在になるといふものがあるけれども、これは私には理解出來ない。何故ならば日本の國體では、この立憲政治下において、臣民として左様なる精神を持つものがあるであらうか。何人が最高指導の位置に立つても、その人の頭が

徳川家康的なものでない限り、何處までも　天皇中心政治たるを失はないであらう。故に一國一黨になつても、その人の個人主義政治をやらぬ限り幕府的存在にはならないと思ふ。（昭和十五年十月）

翼賛と日獨伊同盟

新體制は父系政治と、母系指導と一體となつて、國民の生活に國防の實、萬民翼賛の實あらしめ、之を綜合集結して國家の威力を發揮する組織である。父系政治は權威を、母系指導は慈愛をその主義とすると思ふ。從つて、父系政治に威なく、母系指導に愛なく、之を混亂するに於ては、實踐機關は繁雜不純な生活の渦亂に忙殺されるであらう。殊に、地方指導中樞が縣知事なるに於ては勢ひ父系政治と母系指導と混淆を來す虞が生ずると思ふ。

新體制は、新世界觀より生じた國家觀に依つて生れたものと思ふ。從つて新體制の整備の急を要するは勿論だが、之に沒頭し、國際的處理の活潑性を失ひ、機を失しては首尾本末の顚倒である。吾人は新體制の完備を望むも、內整つて外に施すの術なき窮迫情勢を生ぜしめてはならぬ。實際に於て外圍の情勢が遂に最後の一策を餘すのみとなれば、新體制

活動は自ら內に高まると思ふ。玆に最高中樞機關の深甚なる配意を望まざるを得ぬ。

最高中樞機關は國民の欲するものを、求むるに至らざる前に與へることに努めねばならぬ。

求むる者は十を與へても喜ばぬ。先んじて與へればその半にても喜ぶものである。今迄の施與は常に求むるに至つても尙ほ且つ出し遲れた。玆に不平や呪が生じた。

最低生活の保證と言ふは誤解を受ける。與へ得る全部を與へぬ如く思はしめる。夫故、與へ得べきは全部與へる最高生活の保證であらねばならぬ。是れ以上は與へんと欲しても他の大局の情況より與へ得ぬのである。國家が許す最大限を與へて貰へば、國民は是れ以上求むることの不合理なるを認め、不滿や呪を自ら消殺するのであらう。

實際此の場合の生活は最低と言つても最高と言つても實質は同じなのだ。然し最高と言ふ方が國民を明るくすると思ふ。誤解もないと思ふ。そして施設責任者も與ふべく極力努力すべき心理に自らなると思ふ。

日獨伊同盟は、難局を切り拔ける爲めではない。天惠の機會に乘じ、天與のものを獲る爲めであると思ふ。時局の困難性は或はこの日獨伊同盟締結によつて一層加はるであらう。此の事は國民を消極に陷すか、積極に發展させるかの別れる所である。日獨伊同盟が出來た、是れでまあ安心だ、では、意味をなさぬ。夫故日獨伊同盟は、日本の國策遂行の基礎を固めたに止まることを理解させ、この後、此の基礎の上に立ち上り、覆ひかぶさる夥大の障碍を排除し、國策遂行に惡戰苦鬪を辭さぬことである。卽ち日獨伊同盟は國民の安息所であつてはならぬ。之は日本なる艦船を狂瀾の大海に押し出したもので到達すべき港は遙か彼方にあることを知り、覺悟を決めて行動を取らしめねばならぬ。吾等の安息所は此處になくして、彼處にあるのだ。從つて日獨伊同盟は、單に彼岸に到達する最良の航船の一據點を得たに止まる。萬事はこれからの努力である。

この同盟は獨伊依存の爲めではない、國民の中には、英米依存から、獨伊依存に轉換した如く思ふものがあるやうだ。是は日本の自己侮辱であり、又實際もさうではならぬ。露骨に言へば大東亞共榮圈獲得に就いては日本が獨伊を率ゐて動くべく、世界新秩序の成立

には協同互助で行くべきである。これとても日本が八紘一宇の實現中核たるを忘れてはなるまい。

敵性國家と盟友國家とが截然判別指示された事は、吾等が決意するには有難いことである。

吾等は當に決意する。此の決意を最高中樞機關から弛緩させ、挫折させるやうなことの無いやう切に望むものである。

支那事變の處理とその指導精神の徹底

支那事變處理、新東亞建設と言ふことは、今は無雜作に人々に叫ばれるやうになつたが、無雜作に叫ばれるだけ無雜作な事業でないことは何人も亦考へて居ると思ふ。汪兆銘の政府が成立したとて夫は一段階を進めたに過ぎぬ、下手をやると却つて是が爲めに日本の意思の不徹底と、混濁とを來す虞さへ無いとは言へぬ。よし是が順當に政權を行使し得る組織をなし得ても、建設の前に治安工作がある。此の工作は、滿洲の治安工作を考へても五年や六年はかかる。是が或る程度に進捗しなければ建設は實際に於て困難である。從つて二三十年腰を据ゑてかからねばなるまい。實に是は子孫の繼承事業の覺悟を要する。

斯ることは今新しく言ふ迄でもない。抑も此の大業は、日本が將來子孫の事を考へて開始した事で、此の大業を完成しなければ日本から將來の悠久性を奪つて仕舞ふものである。

此の事業の完成は事業者の腰の據けぬこと即ち中核日本の固成、その力の培養擴充、遂行意思の强烈を前提として發展さすべきで、內政を整へることは絕對的のものである。核心が崩壞してどうして外政に力を用ひ得よう。支那事變處理を主とすと言ふ語は、直ちに內政を第二位にすると言ふ概念を伴つてはならぬと思ふ。東亞建設の大業中には、日本建設も當然含まれねばならぬことである、日本建設の語が妥當を缺くなら、日本を堅持すると言つても、日本をより强固にすると言つてもよい。

國家を堅持する上には、萬般に亘つて必要な統制をなすの要あることは今や異議ないことと思ふが、嘗て自由主義者や資本主義者が强力に反對した。是は、此の主義からすれば當然のことであらうが、我國の要望は歐米の東洋民族壓迫と、之よりする其の搾取とからの解放で、此の現狀の打破にある。換言すれば、此等の國の資本主義的橫暴の排除にある。排除には力を要する。此の力は國家の總力の統一的指向に於て最大なるを得る。分散不統一の指向では費す所は同じでも效果は前者に及ばぬことは明瞭である。況んやわが國は一

大家族國家である。一大家族の經濟的生活に支離滅裂、厚薄、濃淡の差異の甚だしきものあるは許されざることであらう。

現狀は國家の經濟運營に果して此の一大家族たる實ありや。

現狀は國家總力指向に果して完美に統一されあるや。

私は此の答へに對して尙ほ一層統制の周到なる强化を要求するに躊躇せぬものである。

此の統制强化は、自由主義、資本主義からは厭惡され、或は妨害されるかも知れぬ。然る時に、我國にも現狀維持の慢性病的姿體が存續する。この慢性病的姿體で、此の難局に處し、內國家を堅持し、外支那事變の處理が出來るであらうか。之は斷じて不可能と云ひ得る。內に國力の充實を缺いても支那事變の處理は出來ぬ、內に國力が充實しても、その總力の指向を、指向の指導精神を誤れば支那事變の處理、新東亞の建設は出來ぬことは、誰しも認めることと思ふ。

支那事變の處理、新東亞建設に於て私の處ふることは、その指導精神が種々の事情により混濁せぬかである。何となればまだ我國內に資本主義萬能の信者があり、或は信者なら、ずとも、巧利的立場から之を維持するに汲々たるものがあるからである、そして是が歐米の資本主義現狀維持の國家の夫等と相呼應しつつあるからである。

此等の人々の腹中には、日本は早く戰をやめ、歐洲大戰に乘じて金儲けをするのが悧巧だと思つて居る。それ故戰爭の終止を早くしたい。終止を急ぐことは拙速でもよいとなし、曲りなりでも良いとする。玆に不徹底を生じ、指導精神の混濁を生じ、甚しきはこの指導精神を無視し、遂に他の指導精神の現れとなつて結果づけられる處がないでもない。

然らば新東亞建設の指導精神は何かと言ふに、是は私が事新しく言ふまでもない。彼の滿洲建設の指導精神と同じく八紘一宇精神である。從つて資本主義經濟機構であつてはならぬ。

資本主義で支那に臨めば、日本が成功した場合に於て、歐米に代り得た事にはなるが、玆に日本と相對關係の資本主義抗爭國家を成就させ、怨恨の集積は復讐の念を增長し、永

く東洋の平和を希求し得ぬことになる。語を換へて言へば、將來の敵國を日本は大犧牲を拂つて建設するに等しい結果となる虞がある。

假りに、支那に統制なき資本主義の氾濫を許さんか、彼等の豐富なる物資と低賃金とは日本の國内産業を壓迫し驅逐するに至つて支那を建設して、日本を崩壞させるの愚に陷るのである。

然し乍ら日本の强力な現狀維持的資本主義者は遠き將來より、又國家全體の事より、目前、自己に有利な支那の建設を無自覺的に或は自覺的に企求することによつて、一歩誤れば八紘一宇の指導精神に悖り、或は之を混濁し又は全然相反する建設を成就するに至ることを玆に繰返して言はねばならぬ。

夫故に支那建設を八紘一宇の指導精神によつて成就せんと欲するなら、日本は先づ自己の國内の情勢に就いて檢討する必要ありと信ずるものである。

然るに國内の體勢は一體國家主義、一大家族國家主義に完全に統制組織されて居らぬと

思ふ。

玆に日本の「なやみ」がある。此の國内統制にも現狀を認識すれば、敢て正面より反抗し得ぬものも裏面の策謀は決して手を控へまいし、來る者の不明の前に現狀を改革することを危險視する事大思想の障害もあらうし、英米通商の利澤を放棄し得ぬ者の牽制も受はて、徹底的な吾人の要望は中々滿して呉れぬものと思ふ。

若し斯くして、國内統制が不徹底に又徒らに澁滯すれば、支那事變の處理も新東亞の建設も澁滯し且つ不徹底に終ると思ふ。

汪兆銘政權が出來ても、吾人は汪兆銘は支那人であり、支那を愛するが故の蹶起であることを深く思ふものである。汪兆銘を第二の蔣介石たると然らしめざるとは、一に日本の爾後の施措如何にあり、日本の國威國力の如何にある。日本の國威國力が彼に對し作用せざる時に於て如何なる結果を起生するであらうか。

彼は支那人であると共に蔣の盟友でもあつた。蔣も支那を愛し汪も支那を愛する。蔣は、

英米露を背景とし、汪は日本を背景とする。背景の强弱、その力の消長を大高の位置より觀察したらどんなものであらう。否、英米露の勢力が汪の背景に浸入し日本勢力を牽制し得るに比し、日本の勢力が蔣の背景に浸入し得ぬ現狀でどうなるであらう。揚子江や珠江の解放はかゝる見地よりしてどうなるか。私にはわからぬ。唯だ結論として汪兆銘の背景に日本の獨善的陶醉を許さぬことを思はしめるものがある。

又或る時機に於て、日清戰後の如く第二の三國干涉なしと誰が斷言出來る。

張作霖は嘗て私に語つた。日本が死生を共にして作霖を助けて呉れるなら、自分は支那を統一し、滿洲は日本にやつても良いと、そして彼はどたんばに於ける日本の背負投げを憤つた。

袁世凱は支那の帝位に就くを日本が支持するなら、東三州は日本に割據すると言つた。然し賢明な日本はかゝる場合に他の列强より必ず大抗議の生ずるを思惟しその献上品を拒絶した。

三國が强行な干涉を敢てするに至つて日本はどんな態度に出るか、汪兆銘を援くる爲め

焦土となるを辭せぬのでなければ今の措置は無意味である。何となれば、汪を援くるは手段であり方法であつて目的は新支那建設にあるからである。

玆に至つて事は明瞭。日本は蔣介石と戰つて居る如くして、實はその背景國家と戰つて居るのだ。此の認識はどれだけ徹底して居るか。

此の背景國家が援蔣の手を引かぬ限り蔣は滅びぬ。日本は此の背景國家の援助を許して蔣を倒すを欲するのは矛盾である。

故に此の背景國家をどうすることも出來ぬ日本は蔣をどうすることも出來ぬのである。實に此の背景國家の援蔣を放置して蔣のみを倒さんとすることは、力の浪費となる。

私は面白い現象を日本に見る。蔣を倒さんとする日本が、蔣を支持する此等の國家と結ばんとするこの現象である。蔣を絶對に援けぬと言ふ條件で結ばれたとして、之を結果に於て期待出來るであらうか。

玆にまた面白い事がある。蔣を見放した背景國家は直に支那に於ける利權獲得を斷念するであらうか。援蔣は利權獲得が目的である。背景國家は蔣を見放して利權は見放さぬであらう。然らば蔣を見放した此等の國家は、その利權を何處かの誰かに要求するに決まつて居る。

玆が面白いと言ふのだ、此等の國家は汪の背景たる日本に要求する。日本は之を斷然拒絶し得るか。

日本には英米崇拜者も恐怖者もある。親善者もある。之を許すとする。此等の國の利權は更に日本の驅逐した支那に恢復する。

ここで私は尋ねる。何の爲めに日本は今まで戰爭をしたか。何を欲して新東亞建設などと力を入れたか。

支那を白色人種の壓迫搾取から救ふ。日支を不二一體的國家の建設、それが出來たか、戰爭目的は遂行出來たか。

まあ、これでもよい。此の際國家の破滅には換へられぬ、と泣き寢入りするならそれでよい。經濟的の、人命的の犧牲はどうするか。之を國民が甘受するであらうか。

英米等が此の牛を馬に乘り換へる時機を狙つて居らぬと誰が言ひ得るか、又此の乘り換へ條件を良くする爲め、今は宣傳に、實際に、强力に援蔣を主張して居らぬと誰が保證するであらう。そして此の乘り換へる機に蔣汪の妥協が成立せぬと誰が豫言し得るか。

第二の三國干涉などと面倒な威力を用ゐずとも、平和の美名の下に日本を虻蜂取らずに終らせる方法は前述の如く存在して居る。況んや、日本自身に早く平和を欲求するものの現存するに於ては、私は深く之を憂ふるものである。

今、衞に甚だ痛快にして勇猛の聲を聞く。曰く英米を討て、蘇聯を討てと、あまり猛り立つて貰ひ度くない。それは現に日本は支那で全力を盡して戰つて居る。成る程、我海軍そのものには餘力があらう。英米に進擊するのではなく、來たらやる位は何でも無いであ

らう。又英佛も蘇聯も今歐洲で多忙であらう。支那で戰爭をして居らぬなら、是は面白い時機だ。私もやつて見たいやうな氣がする。

英米がいくら日本の支那に大手を振つてのさばるのを嫌つたからとて、正面に日本に戰爭を仕掛けるだらうか、陸軍輸送は問題にならぬ。海軍だけで日本を參らせ得るか、その力があらうか。私は來て呉れるなら、そんなに恐れぬ。經濟的に見れば是は英米の愚策だ。その愚策を果してやらうか、日本に金をかけて餌物を提供しようか。

と言つて日本から出掛けるのは是も愚策に近いやうに思ふ。

もしやるなら蘇聯と支那の陸軍、英米の海軍の協同作戰だ。之なら出來る。是れは支那事變前に私の考へた事だ。是を最惡の場合として日本の軍備充實を圖るべく提唱もした。而も當時外患の恐れは充分あつた。少くとも蘇聯の準備、支那の準備は玆にあつた。然るに日本では政府要路の人さへ、目下何處にも戰を日本に挑む國は無い、是れ以上の軍事費を要求すれば軍は國民の怨府となると新聞に發表し、國民も亦危機を認識しなかつた。そ

して彼の不祥事の發生となつた。その後、戰は蘇滿國境に起らず、北支に起きた。私は窃に蘇聯の蹶起を憂慮した。然るに意外にも蘇聯は起たず國境の小ぜり合を試みたに過ぎぬ。之は私には不可解であつた。英米の希望は蘇聯をして日本を牽制せしめ、支那に充分の力を注ぎ得ぬやうに仕度いであらうが、蘇聯にしては、さうして西方の手を緩めるのは當時考へものであつたので英米の手に輕く乘り得なかつたし、亦國內情勢からも、之を敢てしなかつたのである。

それで支那は日本と開戰後、此の點が恐らく期待はづれになつた事と思ふ。然し蘇聯もさるもの支那の歡心は失ひ度くない。玆に張鼓峯や滿蒙國境戰をやつてお茶を濁した。勿論他に幾多の事情の有つたことも認められるが、かうも見る事は出來ぬか。

蘇聯は辷り込みの上手な國である。日清戰後は滿洲にずる〳〵辷り込んだ。滿洲事變後は外蒙に辷り込んだ。支那事變では西部支那へ辷り込みを試み、今も試みつつある。最近では波蘭へ辷り込んで仕舞ひ、今はまたその西北に辷り込まんとして居るが、機會を得れば南方へも辷り出すと言つた氣勢だ。蘇聯としては東方へ進展して强國日本と衝突するよ

り此の方が遙に賢明なやり方だ。之を恐れた英國は力を此の方面に注がせぬ爲めには東進を望んで居ると思ふ。

然るに局面は轉變し、蘇聯は火事を西方に發見し、西方で盗坊稼ぎを始めた。是は英國としては不利であるのみならず、更に南方でも盗坊稼ぎを仕兼ねまじき形勢を示して來た。面白い事は蘇聯の南方進出は英國勢力との正面衝突であつて、英の陸海軍は陸上の南進には手も足も出ぬとも言ひ得る。從つて英國の焦慮は極めて大となつた。他力本願政策は茲に痛みがある。蘇聯が東方に力を注ぐは望むが、日本を痛めつけて大强力となれば次に來るものは南方である事を推測し得る英國は、蘇聯の大膨張は望まぬ事と思ふ。此の英蘇衝突に英國は到底米國を引き込み得ぬので、今は日蘇に紛糾を生じ少しでも自己勢力方面へ手を延ばさせぬことを望んで居るのであらう。

茲に又面白い事がある。英米が日本を怒らせ、日本が蘇聯と結び、蘇聯は外蒙、靑疆方面より東方には進出せず、日本も此の勢力を認め不可侵を擔保するから、まあ南方へ御隨

意にとやられると、是は英國に取つて大變なことになる。それ故英國も今はあまり日本を怒らせ度く無いと見るのが適當と思ふ。米國にもこの氣配は見える。

私はかくして印度が露の脅威を受けるやうになる事を實は見度いのである。

此の際蔣が英米の背景で西南支那を保持して居るとしたら益々事は紛糾し茲でも亦英蘇の勢力爭ひが起る。

故に英米が日本を怒らせる事は今は不利だ。今なら日本と蘇聯とは手を握り得るからだ。手を握らぬまでも事を構へぬだけで、日本は蘇聯の南方進出は當分默視し得るし之を厭ふ理由も無い。支那が蘇の包圍態勢下に陷ることは將來に於ては問題となるが、直接日本勢力との衝突は今の處先づ無いであらう。

茲まで檢討して來ると日本が今重大な問題、支那事變處理といふ場合、何をしたらよいかと言ふことは自明のやうに思ふ。

私は全力を注いで支那事變を解決する。此の國策の遂行を中途半端にして、他に手出し

するのは損のやうに思ふ。否、此の支那事變處理を徹底させるに最も都合よき方法、卽ち北方に於ては一切の物質精神的の消費を避け、蘇聯をして南進、英を脅威させる當然の結果を招來させる方が賢明ではないか。是は可能性があると思ふ。

玆に更に日本の根本の成立發展の絕對の擔保、卽ち、日滿支一體不可分國家の構成成らば將來の事は得て語り易くなる。北方障害の排壓も南方障害の除去もさして困難でなくなる。此の不可分國家によつて自給自足も容易にならうと思ふ。

私は此の故に、今は此の日滿支一體不可分國家の構成を絕對必要とするものである。

此の絕對必要の前に、之が實現を遲延し障碍する萬般の事を排除するとも、自ら之を釀成し又は惹起することを好まぬ。此の事は又强力に現在のわが支那事變處理、新東亞建設を妨碍するものあれば之を國力の許す範圍で、此の大事業を虻蜂取らずに終らぬ爲めに絕對の努力を必要とする。

此の妨碍物排除の爲めには、戰をも辭せぬ準備を以てするのは當然である。やるなら此の方面である。

私は前に國力の範圍と言つた。甚だ妥協的に聞えるが、日本を崩壞させては大事業は功を收め得ぬ。徒勞に終るからかく言ふのである。

或る者は、一度どん底に落せ、うんと力が出ると言ふ。此の考は、女房に死力を出させるには家に火を放て、女房は平素擔ひ得ぬ簞笥を擔ひ得る力を出すと言ふに等しい。女房は簞笥を擔ひ出しても家や他の家財は燒けて、大損害を來す。吾人の外交や政治は此の國家がどん底に沈まぬ中に之を救ひ養ふ所にある。國家をどん底に沈めて、その力を出させんと欲しても、立ち上り得なかつたらどうすると言ふのか。若し之を待つて居る國が時こそ來れと討ち込んで來たらどうする。鎖國當時とは違ふ。油斷も隙も許さぬ、呪んや國內でぼろを出す如きは、他に乘ぜらるゝ機會を與へるものである。故に私は叫ぶ。速に國力の充實を計る萬般の施設を徹底せしめよ、國力不足の國家、事業を負擔し得ぬ國家となつては萬事休す矣である。

今迄の統制は或は攪亂にならなかつたか。今迄の國民生活はまだ事變處理から遊離して居なかつたか。今迄の時局認識は不徹底でなかつたか。國家の結束はどうであつたか。

現狀に於て、國民經濟生活を偏傾させるに於て次に來るべきものの何であるかと想像しても吾人は懼然たるものがある。此の缺陷だらけの狀態こそ、思想的崩壞の軌道を辿るものと言へる。此の缺陷を存在せしめては、他の關係がよく蘇聯と結ぶことを勸告しても、おいそれとそれを斷行し得ぬことになる。此の實狀は獨逸と異る。獨逸は蘇聯と結んでもその思想の震盪を受けぬだけの準備と自信とがある。日本の現狀は決して獨逸の如く、然りとは言ひ得ぬ。否、頗る危險狀態にあると言へる。

斯く觀察し檢討して來れば、指導中樞は宜しく新情勢に稽へ、我指導精神を堅持し、斷乎として他の牽制を排し、成立の情實を振り切り、國內改革に邁進し、國民の信賴を繫持し、難局打開の自信を高め、生活苦を透徹せる認識の下に甘受する依據を與へよ。然らずして支那事變の處理、新東亞の建設を叫ぶも、そは不成功を將來に置きたる焦躁的勞苦に過ぎぬであらう。

私は絕對に斯くの如きことなきを信ぜんと思ふ。望むらくは、この杞憂の速かに除去されむことを。（昭和十五年三月）

右は昭和十五年三月に筆を執つたものである。其後獨蘇戰が起り、米國の敵性發揮が露骨となり、遂に戰力を以て日本打倒にまで發展して來た。そして英米蔣蘭の提携が實現し、更に蘇との提携にも想到するに至つた。斯くなれば支那事變の處理は此の敵性國家群日本打倒行爲と分離しては考へられなくなり、寧ろ此等を强打することが支那事變を處理するの道なることが一層明確となつた。今や日本は、支那事變處理の爲めにも、共榮圈確保の爲めにも進む道は一つとなつて來た。玆まで來れば仕事は却つて樂になつたとも言へる。私に言はしむれば此の敵性國家群の勢力を東洋より排除すれば、支那事變の處理は自ら出來ると思ふ。北に西に南に大飛躍をする秋が來たのである。

第二編

銃後のことども

ソ聯が、對日軍備は完成した、世界何れの國か我がソ聯の大軍に敵するものありやと豪語した。蔣介石は日本を假想敵國として軍の編成を改革し準備を充實し、要所にトーチカを築き、軍用道路を築いた。英米兩國は援蔣政策に出で頻りに支那より利權を獲得しつゝある。最早や開戰は時の問題だ。ソ滿國境方面から起るか、北支方面から始まるかと言つた當時に、日本國内では、目下何れの國も日本に戰を挑む所はない。軍事豫算はこれで十分だ。是れ以上軍が豫算を要求するに於いては軍は國民の怨府となる、と言つた言説が、高官、要路の人から放たれた。

危期といひ然らずと言ふ吾等はも弄ばれて幾日あり經る

一部に焦躁の心が漸次高まつて來て、此の儘に推移するに於いては、日本は取り返しのつかぬ情勢に陥ると憂ひ慨く者が多くなつた。

後れさる備をだにも許さずて勝つを強ひらるる軍あはれなり

私はかうした空氣を後に牢獄生活に入つた。牢獄の生活は私には有意義なものであつた。私は靜かに書を讀み、歌を作り、自己を反省する事が出來た。

然し來るものは遂に來た。事はソ聯の越境から起らず、北支支那軍の不法射擊から起つた。豫期しなかつた者もあつたらうが、豫期した者も勿論あつたと思ふ。少くとも早晩かくなる豫感は、情勢に注意して居たものには既に早くから有つた筈だ。

私はコンクリの高塀の外にあわただしい鈴の音を幽かに聞いた幾日の後に、それが支那事變の號外であつた事を知つた。

私は此の事變に就いて深く考へさせられた。そして、ソ聯が立つか、立つとすれば何時

立つ、英米佛はどうする、など考へなくてよい事を考へた。私は寧ろソ聯の立たぬ事を不思議に思つた。

杞憂とのみ打ち消すべきか支那事變長びかば取り返しのつかぬ事も起らむ

第三國關らぬ中に逸早く戰ひ勝つべきなり吾は然か思ふ

事變はかくする中に擴大して、上海に及んだ。それが案外膠着狀態らしく、私の心をあせらせた。

これは良くない。かゝる所に暇取つては、そして此の南方に大軍を吸收されては、北方滿洲方面に於ける大事の場合に轉用が困難になると憂へた。

此の他の人々も恐らく同樣であつたらうが、何か痛き所に觸るるを恐るる如く、此の上海戰の長引く事に就いて語るを恐れたらしかつた。

わが同胞等待ちて默ふかく居たりしがこの日朗かに語りはずめり

その上海戰も遂に我が勝利に歸した。速戰速決主義と言つても大陸支那は廣い。それに彼が自ら恃んだ如く支那軍隊の裝備も良く、戰鬪力も嘗ての支那軍の比でなく、戰は私の期待の如く進捗せぬのであつた。それからの私の夢は多く支那事變に關はつて居た。自らも噴飯を禁じ得ぬやうな馬鹿々々しいものもあつた。

官位勳等を失つた事が、頭にあつたのであらう。一兵卒となつて戰場で昔の友の將軍が馬上に大軍を指揮する傍に働いて居たが、その昔の友等は、知つてか知らずか眼にもとめなかつた夢などもあつた。牢獄の壁には軍隊で圖示に用ゐる隊標が現れる。これを私が眼で置き換へ動かし、いつか軍司令官にでもなつたやうに對支作戰を練つて居るのだ。そして馬鹿な、と自分を叱つて歌の手帳に眼をやるのであつた。

私は日露戰當時の國情も知つて居る。當時の國內情勢と今回の支那事變に於ける國內情

勢とは較べものにならぬ。

日露戰當時は、若し日本が敗ければ、「滅亡」すると言つた考へが浸み渡つて居た。「滅亡」が眼の前にぶら下つて居た。國民が死線に立たされて居た。此度の支那事變は、勝つと決めて居、そして、滅亡などは夢にも考へぬ。玆に驕慢がなくとも樂觀があつて、眞劍さが足らぬ。そこへ勝つた事ばかり傳へられて、國民に支那の如きは片手間で片付くやうな觀念を與へて仕舞つた。これでは國內の緊張振りが日露戰當時に及ばぬのは當然だ。

東京を通過し、東京の狀況を見て出征した兵は私に重大な心を漏らした。「頼むぞ軍隊」などと言つても、東京は、遊蕩享樂の衢ではないか。此の戰時狀態下に、街路に醉どれの眠つて居ることなどは戰線の兵に知らし得ようか、國家としても、恥辱だと思ふ。取締る役々の怠慢と言はれても仕方ないやうだ。

私は或る團體の防空演習に頗る不熱心なのを見て、その事由を聞いたら、「露西亞の飛行機などよう來られぬ」といと事もなげに言ひ切つた。どうも時局の認識が足らぬ。

今回の支那事變は說明に困難と思ふ。國民に眞に理解させるのに面倒のやうだ。戰爭な

ら戰爭で目的も明瞭だ。やる事も單純だ。遠慮會釋なく敵軍を擊滅し、遠慮會釋なくその遂行に國家總力を指圖すればよい。然るに今回の支那事變は事變のやうであり、興亞だ、建設だと言つた平時の事業のやうな事も織り込まれ、總意、總力はかうした種々の方面に感じ方、見方、解釋等が分割される。從つて時局を認識する上に於いて玆に頗る複雜なものがある。それが複雜なだけ、これに對する意見も異つて來る。總力の統一指向は言ふべく望むべくして、そこに困難が伴ふ。絶對必要の事として遂行しなければならぬ、と知りつつもさうなる。

私は考へさせられる事が有る。事業家が事業をやる時、その資金の一部を割いてこれで俺のお墓を建てるのだと言ふだらうか。又これをやるだらうか。私は死ぬか生きるかの病氣の際は先づ生きる爲めにその資金を消費盡してもよい。早くその一部を墓造りの爲めに割いて、藥を買ひたいが、此の金は墓石を建てるに必要故遣へぬなどとは言はぬし、またそんな事は仕度くない。病人を側に置いて墓場造りの相談をやつたら病人は自身も死ぬも

のと思ふだらう。もう萬事濟んだと思はせ、氣落ちさせるに決まつて居る。墓場などは事が濟んでからどんな立派なものでも建てるが良い。今の所有金は生き行く爲めに使ふがよい。私は金の事より病人に氣落ちをさせ、もう萬事これで終りだと緊張心を失はせる事を恐れる。

時局下の日本に於いてその施設、指導などにかうした心の分裂や、緊張を弛めるやうな事がないだらうか。又國民に知らせた方が眞に擧國的緊張を持續するに有利と思はれる事で知らされずに居ることはないだらうか。

私は街頭や新聞で「國民一日戰死」と言ふ語を見た時、實に悲しい氣持がした。標語と言ふものはどう言ふのがよいか知らぬが、國民一日戰死の標語は三千年來の日本の此の神聖國民に有り得ざる、認容し兼ねる前提の有るやうな氣がして、その消極的な標語と言ふものより、さうまでしなければならぬ國民の不甲斐なさを悲しむ。戰死した氣で喰はず呑まずにと言ふのかどうか私には判らぬが、かうした標語は果して八紘一宇、興亞に飛躍すべく勃々たる意氣を要する國民に適するものであらうか、私はこれを悲しむものである。

此等のことも眞劍に時局を認識させ、堅忍持久、自戒自肅、而も明朗に快活に颯爽と使命に邁進させる上部の心とは離反し、混濁し分裂させる傾向に屬するものかも知れぬ。時局認識の徹底を期すること、行爲せしむる事も亦難い哉である。

レビュー映畫のこの滿員を日本の餘裕と說きてひそかにさびし
藁の火の燃ゆるが如き國民と日本人吾等みづから言ふや

日本國民の本來の姿はどんなものか、私は歷史を見て一難毎に奮ひ立つて、これを打開し、そしてこれを動機に、更に發展を續けて來た事を認め、吾等にもこの父祖傳來の負けじ魂の存することを信ずる。

電力がどうの、石炭がどうの、砂糖がどうのと言つても、私はそれが根本の不足から來て居らぬと認めて居る。是等は遣り繰算段の宜敷きを得ぬ結果だと思つて居る。こんな事があつても、又此の位の程度の生活壓迫は何でもないと思ふ。大體、日本人は未だ眞に苦

しんで居らぬ。眞劍さを缺き緊張の足らないのも、主として此の苦しみがまだ痛切に各人に迫つて居らぬことが主因かも知れぬ。若しさうだとすれば、日本人をもつと眞劍にもつと緊張させるには、苦境に陷らせるにあると言ふことになる。馬鹿々々しい事だ。今の生活狀態で、もし現在惠まれて居るものを苦しむ程度に窮迫せしめたら、現在苦しんで居るものは、死ぬより外ない。吾人が爲政者に賴む所は、個人では調整し得ぬ、いや個人に委せて置けば愈々懸隔の差の益々甚だしくなるのを、よく力を以て調整することだ。その調整が不手際だと個人は却つて窮乏に陷る。何だか論より證據と言ひ度い事が多々ある。私は此の際ただ堅忍だ、持久だ、節約だ、と言ふ一面に前途に光明と希望とを大いに見せしめて欲しい。少くとも光明あり希望ある事を知らしめて欲しい。

希望あり光明あれば皇國のけふの國難はむしろ讃へむ
興亞といふ一途の歩みもつことを幸福と言はむ苦しくはあれど

動員と言ふのは陸軍で軍隊の平時態勢を戰時態勢に移すこと、狹く言へば平時編制を戰

時編成に移すことだ。それ故動員を完成するには、根本基礎の平時編制が完全でなければならぬ。

日本は支那事變の起つた事を動機として苦しい立場にある。それは或るものは國民的に平時編制が出來て居らぬ爲め、動員も必要、平時編制の建て直しも必要と言つた混雜、繁忙困難を招來した。動員は必要がなくなる時に復員があるが、平時編制はそんな際もの的、事件屋的なものでない。然るに明治維新からの平時編制が恰も改變を要する時に、支那事變が起り、玆に動員と同時に、平時編制の改革も要求されたことは、幸か不幸か知らぬが、出來れば、此の際やり貫くが良い。私は他の方面は暫く言はぬ事にする。國民の思想精神の方面では、現に精神總動員の語を聞く。此の語は從來の平時編制精神を戰時編制精神に強化する事のみを現すけれど、その實は此の平時編制精神が現代日本の戰時編制精神を強化する基礎として不完全極まるものなる爲め、動員業務中に、平時編制改造業務も織り込まねばならぬ事になつて、業務の繁忙困難はその度を高めたと思ふ。

私は精神總動員の業務機關の出來た時、その中に思想精神の平戰兩時に於いて最も重大關係にある文藝人が何人加はつて居るかを見た時、失望を禁じ得なかつた。國民に精神建設の養分を提供し、改造の藥をも毒をも盛り、これを嗜好品として食せしめ得る文藝人が居らぬ事は、人間の育成に保健醫も、治療醫も居らぬ事に等しい淋しさ悲しさを感じた。然し私は退いて考へて見た時に、之れは果して、除外した方が認識不足か、除外された方が無力なのか、無關係なのかも詮索せざるを得なかつた。軍隊の平戰兩時の編制に於いて有力な兵器、必要な器材は除外したくも出來ぬことだ。これを除外すれば編制の價値も意義も無くなるからだ。從來の文藝人の活動は平時編制精神に必要性が認められぬ存在であつた結果か、若しくは閑人の閑文字か、或は有つて毒素を放つ存在と認められたか、又は世にあつてよし無くてよしの慰安娯樂の提供者位に考へられて居たか、何れにしても痛切必要缺くべからざる存在たる力は放つて居らなかつたと言ふ外ない。或はさう認められて居らなかつたと言ひ換へてもよい。これは從來の文藝人があまり專門的になりすぎたとも言ひ得、お高くとまり過ぎたとも言ひ得、象牙の塔に籠り過ぎたとも言ひ得るが、何れに

しても結果は此の大時局に有つてよし無くてよしの扱ひを受けるに至つたとしたら、私は頗る不滿を感ずる。かゝる時局下の國家では國民各自皆夫々その得意とする所を以て、國家の此の事業の達成に對し、陰に陽に協力し、支援すべきものだと信ずるからである。國家が總力を動員して使用する現狀に於いて、此の總力から文藝人を除くとすれば文藝人の力は用ゐるに足らぬか用ゐるを忌避するかであり、此の場合除かれる事は文藝人の恥辱とも言ひ得る。私は思ふ。文藝人は從來超然たり過ぎた。國民の思想、精神方面に關する仕事としては餘りにも表面的閑人の閑文字方面のみを以て取扱はるるに滿足して居た。

私はさうした高踏的な行き方を惡いとは言はぬが、國家から見てかくあらしむるは、此の際惜しい事である。力の死藏である。國家の編制に一役を受け持ち得る技倆を持つて居るもの、そして是非文藝人の力をからねば他の者には出來ぬ部面のあるのに、文藝人が敢て自ら手を拱して之に加はらぬのは見やうによつては國民として忠實でないと思ふ。

畢竟國民の時局認識の不足、精神編制の不完全なども、或は文藝人の進んでの活動が不足して居り、これを活動させる、國民組織の不備なことなどが重大なる關心を持つて居る

かも知れぬ。

私がこんな事まで立ち入つて言ふのは出過ぎた事かも知れぬが、私はどうしても此の支那事變を、國家に最も效果あらしめねばならぬ點に於て、責任を感ずるものがあるので、敢て思ふまゝを述べたのである。

包圍突破の國民活動

兵書を繙くと、包圍戰、中央突破戰、各個擊破戰等の戰略や戰術が說かれてゐる。

包圍戰とは敵の一翼を包繞的に、若しくは同時に兩翼を包繞的に攻擊し、敵を包み擊つことであつて、彼の日露奉天戰の如きは露軍の右翼の包圍攻擊であつたが、第一軍が奉天の東方に於て露軍の中央を突破したので、此の右翼包圍の乃木第三軍と相俟つて露軍主力を奉天附近で東西から包圍し得たが、兵力不足の結果、完全に露軍を包むことが出來なかつたので、露軍は此の袋の口から辛うじて北方に逃げ出した。あの時我に尙ほ二師團もあつたら、袋の口を完全に塞ぎ、眞の殲滅戰を行ひ得たのであつた。

包圍戰は、夫故我が兵力が敵に優る時に於て最も都合よく實施出來る。

あの奉天戰は、二十萬に近い劣勢な兵力の日本軍が之を實施したのであるから、無理や

危險を伴つて居たが、軍の精鋭と、統帥の優秀とより必勝の信念の下に、大膽に實施されて成功したものである。

中央突破と言ふのは、包圍の如く敵翼を包まずに、その正面に攻擊の重點を指向し、之を突破し、此處から、戰果を擴大して勝敗を決するのである。

敵正面が廣大な時、又は翼に向つて作戰するを得ぬ場合、又は包圍を受けた軍隊が一方に活路を求める時など此の戰法を實施する。第一次歐洲戰の西部戰線の如きは、翼方面に軍隊の行動を許されぬ爲め、此の突破が繰り返された。

關ヶ原の戰に西軍に在つた薩摩の軍が敵中を突破して引き上げたことは、餘りにも有名な話である。

突破は敵戰に深く突入すること故、不成功の場合は、勿論、戰果を擴大し得ず、敵の對應部隊に阻止されると、飛んで火に入る夏の蟲の如く、自ら求めて此の部分では敵の包圍に陷ることになる。

各個擊破とは、敵兵力を分離させるか又は其分離に乘じ個々別々に槍玉に上げることで

あり、相互の應援困難な地形にある敵とか、統帥の拙劣な敵とかが此の弱點を暴露した時に乘ずる戰法である。

然し此等の戰法は一に其場合に應じて勝を得る爲めのもの故、實際には、かうした戰法が大なり小なり並用されるもので、此度の獨ソ戰に於ける獨軍は、突破卽ち楔狀攻擊を實施し、それから煙火のやうに左右に戰果を擴大して敵を包圍し、その中の敵を殲滅すると言つた突破を續けて居るやうである。

此の突破は敵を包圍態勢に置くことを覺悟し、此の困難裡に一意戰勝を開拓するを要するが故に、自信卽ち必勝の信念がなくてはならぬし、攻擊精神が旺盛で、斷々乎としてその目的達成に努力しなければならぬ。そして成果を大ならしむる爲めには、此の打ち込んだ楔を培養し擴大する如く後續兵力を加入するを要する。

此の部隊が消極的な精神に陷れば、右を見ても、左を見ても、前を見ても、時には後を見ても、敵であるので、包圍されたと言ふ受け身になり、志氣が沮喪し、活動が鈍り、そして遂に敵の餌になつて仕舞ふ。

戰略や戰術には、餌を敵に與へて有力な軍を此の方面に牽制し、此の時機に他の方面で戰勝を求める方法もあるが、此の場合の餌も、頑張り頑張つて、出來るだけ多くの敵を引き受ける方が、主力の戰勝を容易にするので、消極精神に陷つてはならぬのである。

私は重ねて言ふ、突破戰は特に必勝の信念、攻擊精神、志氣の旺盛、團結の强固、統帥指揮の優秀と、此の打ち込んだ楔を生かす後續力の不滅とが要求される。

こんな戰略や戰術、而も夫が常識でも判る程度のことを長々と述べたのは、我國民に一應此の位の事を知つて貰はねばならぬことを痛感したからである。

といふのは、日本目下の狀勢が全く敵から包圍を受けて居り、之を突破するより外、生くる道が無いやうに思ふからである。

卽ち、今更說くまでもないが、西に蔣政權支那、南に、英のビルマ、印度、馬來、濠洲、並に蘭領印度、東に亞米利加、そして、北にソ聯がある。

日本は此の包圍內に在つて、經濟封鎖裡に自己を養ひ、自己を築き、そして活路を求め

ねばならぬ。茲に來る方略は卽ち突破あるのみである。

此の突破の爲めには、先づ彼等が包圍網の縮迫を拒否し、突破行動に必要の據點を確保し、さて國家を擧げて熱火の一團となつて、この包圍網のどこかを突破する。この外はないのである。

斯る狀勢に至ることは旣に滿洲事變以來特に判知し得たことであるが故に、私は直接戰鬪に當る力の方面に於ては信賴してよいと思ふが、之を推進し增補し、一體となつて此の國難突破に當る、國內の狀況、國民の心構、並にその活動は果してどうかと言ふことになれば、何と答へてよいか、一寸困るやうにも思ふ。卽ち、

突破必勝の信念は出來て居るか。

千挫不撓の積極的精神はどうか。

一億一心團結强固で、その突破敢行の實質を具備して居るか。

湧いて盡くるなき此の突破を成功に導く補强を引き受け得る力が國民にあるか。

私は夫故、眞劍な國民組織と活動とをもつと具體化し、練成して信念を得なければなる

まいと思ふ。

此の組織活動で先づ取り上げる問題は、

一、職能部面に於て應召に因る男子缺員の補充問題。

一、國內に於て特殊の仕事に男子を充當した場合に於けるこの補缺問題。

である。これは生產を減退せしめぬ爲め、又國家機能の運營を澁滯せしめぬ爲めに絕對に必要と思ふ。

然らば此の要員を何處に得るかと言へば、今の處左の如き人に就いて考へる外ないやうである。

一、婦人を之に充當する。

一、學生、生徒、敎育部門の人を以て充當する。

一、有閑人及一時中止するも何等支障を來さざる業界人を之に充當する。

之が爲めには豫めその代行し得る職業を決定し、その充當人を決定し、恰も軍隊に於ける補充兵の如く一定期間之を練成して歸還せしめ、必要に際し之を召集する方法を設ける

がよいと思ふ。

或種の所謂文化施設の如きは之を缺いても苦痛や打擊を國家に與へぬと思ふ。

婦人をして代行せしむる事に就いては可なり研究を要すると思ふ。

夫は我が日本の國體が外國と異り、婦人はその家庭にあるを建前とし、子女の敎育や家事を執るのが本然の仕事となつて居るからである。然し斯る國家危急存亡の際に於て、一時的の手段として、此の婦人が職場に立ち、又街頭に出て貰ふ如きは機變であつて、之が常道でない限り、毫も否定すべきものでないと信ずる。

然し乍ら婦人が斯る外務に就くが爲め、その本然の仕事たる家事育兒等に支障を來さぬ事に就いて、至大の考慮と適宜の施設とを必要とするであらう。之が爲めには、先づ衣食住の簡易化が計られ、託兒所的のものの施設が必要となならう。

此等の施設は國家が之に當るべきものと思ふが、さうした事に囚はれず、市町村でも、

組合でも、町會でも、或は隣組でも何でも、最も實情に適する方がよいと思ふ。

共同炊事が出來れば都合がよいが、或は主食、主副食物が、特殊設備によつて調理されて、分配すると言つた方法も考へられてよいではないか。

婦人の勞働服なども早く一樣な制式が欲しい。かうした場合、觀念の遊戯などで理窟を言つて居るのはどうかと思ふ。

又各家屋も情況に應じ警備上の通信連絡設備を設けて、監視の爲めの人員を必要の場合節約することなど考へるとよいと思ふ。かうした事は隣組で工夫出來ることであらう。

託兒所と言つた規模の大きいものを設くることが困難な場合、或る範圍、卽ち隣組などの中で預かるやうな方法も產れてよいと思ふ。要は手輕に、安心して外勤に當り得る組織を得ることである。

かうした組織は必ずしも外國に模する必要はない。否、個人主義者の協同的生活の樣式に從ふより、日本の國體に基き、皇道の本義である一體觀の心構に出づべきで、惠み惠まれ、助け助けられると言ふ精神の發揮が大切である。そして常に國家を生かすことが、自

己を生かし、自己を育てることであると言ふ考を持つことである。

隣組は一體觀生活をなす家庭の擴大である。從つて安危を共にすべきである故、防空、防火、防盜等は一體となつてやるべきであるが、他家依存主義ではなるまい。——是等の設備は、各家完全を期すべく、防空壕、防火水、防火砂、戸締の如きはその家毎に設備されなければ、いざといふ場合に獨立性を失ひ、間誤つく虞があると思ふ。

軍隊には非常演習があり、非常持出物を平常定めた器物に入れ、定めた所に置いて、暗黑裡でも持ち出せるやうにしてある。是は各家庭でも、ぬかりなくやつて置くべきものであらう。

國民學校一年生でも、平時訓練して置けば非常の際手足纒とならぬばかりか、立派な仕事をやつた例がある。それ故私は少年隣組でもよい。此の種の訓練をやり、家庭でも又訓練するがよいと思ふ。騒ぎ狼狽へるのが一番いけぬ。

司馬溫公の甕を割つた如き落ち付きと智慧は萬人に求め得ぬものとしても、想定を設け訓練すれば、小兒でも結構間に合ふ事をするものである。

蔣介石さへ娘子軍を設けた。國家安危の場合、國民は皆な戰ふのが當然である。即ち職場人は職場で、將兵の如く戰ふのであり、家庭人は家庭で戰ふのである。

暮すと言ふ安易な語で表現する場合でなく惡戰をし苦鬪する場合なのである。艱苦缺乏に耐へ、活動又活動、國を生かして而して自己を生かすのである。

私はこのことを特に婦人に考へて貰ひ度いと思ふ。男女一體の活動、和魂（にぎみたま）、荒魂（あらみたまいちにょ）一如の活動こそ、國家のかかる際に於ける日本本來の相であると思ふ。

婦人の翼賛

——婦人は家庭建設へ——

私は日本婦人に就いて、何か言はんとする時には、多くの場合、彼の天の岩戸開きの神代史に獨特の存在でいます天宇受賣命を思はずには居られぬ。

「故れ、ここに天照大御神、見畏みて、天の石屋戸をたてて、さしこもり坐しましき。爾ち、高天の原みな暗く、葦原の中國悉に闇し。これに因りて、常夜往く。ここに萬づの神の聲は狹蠅なす皆滿き、萬づの妖悉に發りき。」

と古事記にある。卽ち、暗黑世界が來、妖魔が跳梁したのだ。そこでここに之を打開する八百萬神の天の安の河原の會議が催され、そして私の尊崇する天宇受賣命が、異樣な服裝で起たれて朗かに、明かに、伏せた桶の上で、面白く、可笑しく踊られたのだ。古事記

には次の如く書かれてゐる。

「天宇受賣命、天香山の天の日影を手次に繫けて、天の眞拆を鬘として、天香山の小竹葉を手草に結ひて、天之石屋戸に汙氣伏せて、踏みとどろこし、神懸りして、胸乳を掛出で、裳緒を蕃發におし垂れき。かれ高天原を動りて、八百萬の神、共に咲ひき。」

此の暗黑界、妖魔跳梁、まことに憂慮措く能はぬ時に、八百萬神は天地を轟かす笑ひを發したのだ。そしてかく笑はしめたものは實に天宇受賣命である。私に歌がある。

大き憂に高笑ひつつ行き對ふそこ力もたな大和の民は

現下は將に此の笑を要する。國に、家にこの笑ひを要する。今國民は笑つて苦患に汗血を注がねばならぬのだ。物資の窮乏に心を碎かれてはならぬのだ。此の日本の悠久性確保の難業苦行に志を挫けさせてはならぬのだ。今吾等は惡戰苦鬪中である。勝つか敗けるかの瀬戸際に居るのだ。

術なくも吾等が饑ゑて半ばなるこの戰を挫く思はず

笑つて朗かに、明かに、此の惡戰苦鬪中に、光を、潤ひを、そして心に餘裕を持たねばならぬ。私は今、天宇受賣命を女性にもとめるものである。

女性の翼贊に、此の笑ひのあると言つたら、或は笑ふものがあらう。だが私は眞面目に之を言ひたい。今吾々は時艱克服の生活をあまりに暗くしてはいけない。花は家庭に、國家に常に咲いて居て欲しい。

此の婦人が先に愚痴、不平、呪を發したら國家は暗くなる。家は暗くなる。生活は暗くなることの重大を思つて、私は女性の翼贊にこの笑ひのあることを信ずる。此の笑ひこそ精神方面に於ける婦人の重大翼贊だと思ふ。殊に私は此の時代に育つ子女に、暗さを點じないことは、母たる人の重大な翼贊だと信ずる。

をみな等が生命をかけて戀ふと言はばその欲るごとき男子いでむか

傾城、傾國の言葉はふるい。古くとも眞理は永久に眞理であらう。犯罪の蔭に婦人在りと言ふ如く、私は成功男子の蔭に婦人あり、英雄の蔭に婦人あり、勇士の蔭に婦人ありと言ひ度い。露骨に私の心持を言ふなら、日本の若き美しき少女が、斯く斯くの性格、斯くの識量才幹の男子なら、生命を賭けると言つたら、私はさうした男子として選まれるべく努力するであらう。それら少女の戀の對象になりたい。ここである。英雄を、豪傑を、勇士を育て上げるものは少女の心である。いや之を世に産み出すものは少女の心である。

その國の女がこぞり否といはばヒットラー、ムツソリーニも到り得しや今日に

あの映畫にある、獨逸總統ヒットラーに對する婦人の熱狂ぶりを見て、私はひそかに國の興亡の如何に婦人に關係するかを痛切に感ずる。

眞男子ヒットラーは眞女子の知己を如何に喜んで居るだらう。

私は若き婦人に謂ふ。男子、眞の男子を認識せよ。戀の對象に眞の男子を選め。新體制

の戀とは、眞の男子の認識である。かくして若き婦人が、街頭に家庭に、單なる美貌の男子を、輕薄才子を、彼の修業中に關らず遊蕩放肆を敢てする青年を、その心から追へ。かる時に剛健質實事をなし得る眞男子が現れるであらう。

若き男子、將來國を負うて立つ男子の改良は、實に若き女子の心にあることを思へば、若き女子の翼贊がかゝる所にも存するを考へねばなるまい。言ひ得べくんば之は戀愛翼贊である。奇矯の言と笑ひ捨てて貰ひ度くない。

僞裝文化は餘りにも家庭婦人を輕視した。雜誌の口繪、寫眞を見よ。女優、ダンサー、遊藝人が麗々しく掲げられてある。若き女學生が寶塚女優（生徒とか何とか言つても）にあこがれる奇現象を社會は見遁して居た。そして虛榮を戒むとか、女子の修養とかが說かれて居た。國家は、女優により、遊藝人により支へられては居らぬのだ。人間の生活は慰樂が本ではない。我日本に於ては家庭建設、家庭人建設を忘れたら、國家は崩壞する。新體制下に於ての我々の翼贊には、家庭建設、家庭人建設がある。かゝる建設の爲めに、私

は家庭婦人、默々として緣の下の力持ちに甘んずる眞の家庭婦人に多大の尊敬を拂ふものである。然るに我が國にも、西洋流の婦人があつて、その子女を傭人に託し、時に夫を凌いで社會に進出し、口舌を弄するものもあつて、ジャーナリズムが之を利用し、爲めに何か家庭婦人より此の人々が先覺者の如く受け取られて居るが、私は之を嫌惡するものである。獨逸のヒットラーさへ、婦人よ家庭に歸れと言つた。國家の新體制は、先づ家庭より、そして口舌でなく實行であることを思ふ時、家庭婦人は、もつと尊敬されねばならぬ。もつと矜恃を持たねばならぬ。婦人一般の職能翼贊は實に此の家庭の健全な發展に在るからである。身の程を知らぬものは恐ろしい。バーやカフェーの女が、街頭に出て、そこを通行する家庭婦人に、「贅澤はやめませう」のビラを配つた所がある。配つた者もだが、配らせた者もだ。かう物が首尾顚倒し、本末を誤つては、世は無茶になる。婦人翼贊は決して華美な仕事にある筈がない。私は婦人が此の地道な翼贊に光榮を感じて欲しいと同時に、國家はもつとこの婦人の地道な翼贊を認識し、之に酬いることを考へねばならぬと思ふ。

銃後の婦人に念ず

み民吾生ける甲斐あり日本に歴史ありて未曾有の秋に遭へらく

空虚な誇りに心たかぶるのではありません。實に日本三千年の歴史あつて、未曾有の重大時局です。乗るかそるかの場合と言ふ緊迫性の無い言葉ではなく、私共の死か生かの場合です。生死の一線にあつて、今踏む一歩の運命です。眞劍に考へ、懸命に行じなければならぬ秋です。日本は幸福な國で、日清、日露の戰爭も、近くは滿洲事變も、支那事變も海外で行はれ、銃後の私共には銃砲聲も耳に聞えません、敗走の兵も、流餓の民も、眼に見えません。そして敵の飛行機も來ません、從つて燒夷彈も爆彈も私共の身邊に落下しません。それ故戰爭を身近に感得しません。これが陸地續きの國であつたらどうでせう。戰鬪

の狂瀾に絶えず震盪され、時には身邊の危險に脅かされませう。如何に連戰連勝を續ける皇軍があつても、私共は今のやうにかくも、のどかに有り得ないでせう。此の事は國家に幸か、不幸か、若し眞に國家の興亡と心を一にし得ぬ國民があつたら、國家は大なる不幸です。彼の佛蘭西は、國滅びて文學尚ほ存すと言つたやうな心の國民が居たから、あんなに目に遭つたのです。國と私共とは別物で、國は貸家と言つた單なる居住地的な見方の人々に國が保てる道理はありません。吾さへ生き得れば、國は滅びても幸福でせうか。國なき人、彼の流離漂蕩の國民の哀れさを私共は目擊して居るのです。

天照大御神の女神にいますことは今更申すまでもありません。あの須佐之男命が高天原卽ち大御神の御統治遊ばす國へ登る時、古事記は次の如く書いてあります。

爾に天照大御神聞き驚かして、「我が那勢の命の上り來ます由は必ず善しき心ならじ。我が國を奪はんと欲すにこそ」と詔りたまひて、卽ち御髮を解き、御美豆羅に纏して、左右の御美豆羅にも、御髻にも、左右の御手にも、各八尺の勾璁の、五百津の美須麻

岩戸神樂・天宇受賣命

流の珠を纏き持して、曾毗良には千入の靫を負ひ、比良には五百入の靫を附け、亦臂には伊都の竹鞆を取り佩して、弓腹振り立てて、堅庭は、向股に蹈み那豆美沫雪なす驟忽散かして伊都の男建び蹈み建びて待ち問ひたまはくと問ひたまひき」

とあります。此の國を守り遊ばす爲めに御神威いや高く、女神ながらに、御武裝を整へ、凛然とお待ち遊ばしたのです。お姿が今も私共の眼に見えるではありませんか。

更にまた、あの天照大御神が天の石屋戸にさしこもり遊した爲め、世は暗慘として萬妖悉く發つた時、八百萬神の合議で、此の石屋戸を開くにあたり、そこに女神天宇受賣命の在ましたことを御承知でせう。古事記は次の如く記して居ます。

天宇受賣命、天香山の天の日影を手次に繫けて天の眞拆を鬘として、天香山の小竹葉を手草に結ひて、天之石屋戸に汙氣伏せて、踏みとどろこし、神懸りして、胸乳を掛出で、裳緒を蕃登におし垂れき。かれ高天原を動りて、八百萬の神、共に咲ひき。

と、此の女神の明朗、快活、無邪な踊りに、八百萬神が笑つたのです。國難打開の此の難場に咲つたのです。女神が咲はせたのです。

日向高千穂の山峡の石屋戸に古事記の傳說を今に傳へる岩戸神社では氏子たる農民の節くれだつた手によつて幽玄豪快な天の岩戸の神樂が先祖代々舞ひ傳へられて來た。

此の女神宇受賣命はまた、天孫降臨の際「汝は手弱女にあれども、いむかふ神と面勝つ神なり、故れ專ら汝往きて問へ」との詔を受けて、天之八衢に居て、上は高天原を光し、下は葦原中國を光す神、猿田彦神と問答あそばされて居ます。

則ち國家の防衞に、國難打開に、そして進路障碍の排除に對する、天照大御神と、宇受賣命、二女神の御活動の御相が、現下の銃後婦人に何を敎ふるかは、私が言ふまでもないでせう。二女神の御心、二女神の御態度、二女神の御行ひ、これを思ひ考へて貰へば、私の言ふことは殆んどないやうであります。

然し現代は筆舌の雄あつて行の人は少い。言靈の佑くる國に言擧げ多く、言に權威もなく實行も產れぬやうです。思ふに、行は、信あつて初めて現れます。信念なくしては行動はとれません。

私は銃後一般の婦人に信を持てと言ひ度いのです。迷盲の信でなく、わが祖神の承認遊ばす信を持つて欲しいのです。

信はどうして出來るか。これは面倒な問題だが私は簡單に之を言ひます。先づ世界觀を立てよ。此の世界觀に於て、日本觀を、そしてこの日本觀より人生觀を產めと。此の人生觀を把持せば、信は產れるでせう。

世界の情勢、動き、是は玆で改めて說く要はないと思ひます。

國つひに幾つか殘る限られし地球の上に日本もある
地球の上に殘らふ國をかぞへ居て思ひは到る次の戰爭に

次は日本觀であります。抑も高天原體制は、天神統治、八百萬神翼贊であります。それをそのまゝ、この國土に持つて來たのが日本の體制であります。卽ち、天神の御子現神天皇統治、萬民翼贊である。新體制で萬民翼贊となつたのでなく、肇國の時旣にさうであつたのです。

神代史にある如く、神が我國を造り、神が私共の祖先をお產み遊ばされたのです。そして共に一體となつて此の國を今日に治めて來たのです。

天皇・國土・國民はそれ故一體です。一體とは夫々が歸一不二の關係にあることです。此の一體觀が日本民族の思想です。哲學です。

獨逸や、伊太利の全體主義とは異ひます。彼は個の結束です。我は融け合ひです。天皇・國土・國民が融け合つて居る日本です。此の一體觀で大切な事を通俗的に言へば、他を滅す事は我を滅すこと、他を育てることは我を育てる事です、だから犧牲として大に殉ずるのでなく、大に歸一して大に生くる事です、さらに明瞭に此の點を言へば、國民は、天皇や、國家の犧牲になるのでなく　天皇に、國家に歸一して　天皇や、國家に生きるのです。それ故、私共が　天皇のおん爲め、國家の爲めに命を捨てる事は、大きく生きることになるのです。かう言ふ見地から、職に殉ずることは、その職を生かし、自己も生きると言ふことになりませう。

次に私共、日本國民は、日本國の使命をよく知ることが必要です。國の使命を知れば、國民の爲すべき事も自ら知り得るからです。

日本書記を繙くと、

三月辛酉朔丁卯、令を下して曰く、我れ東を征ちしより玆に六年になりぬ。皇天の威を賴りて、凶徒就戮されぬ。邊土未だ清まらず、餘妖尙梗しと雖も、中洲の地に復た風塵無し。誠に宜しく皇都を恢廓め、大壯を規摹るべし。而して今運屯蒙に屬ひ、民心朴素なり。巢棲穴住。習俗惟常。夫れ大人の制を立つ。義必ず時に隨ふ。苟も民に利有らば、何ぞ聖造に妨はむ。且た當に山林を披拂ひ、宮室を經營りて、恭みて寶位に臨み、以て天元を鎭むべし。上は則ち乾靈の國を授けたまふ德に答へ、下は則ち皇孫の正を養ひたまふ心を弘めむ。然して後に六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇と爲むこと、亦可からずや。

とあります。此の八紘を掩うて宇となすの崇く尊き大御念願こそ實に肇國の大精神で、我日本は、玆に使命づけられて肇められた國なのです。八紘一宇、これは、卽ち一體觀、世界の成就を言ふのであつて、六合を兼ねて以て都を開くことはその中核としての日本の建設なのです。世界を一家としその中核に日本が立つ、何と雄渾、博大な、念願でせう。

抱負でせう。理想でせう。

國にこの大念願、大抱負、大理想卽ち、大使命があります。國民私共は、言ふまでもなく、此の大使命を果す義務があり責任があります。從つて此の國家の使命が私共の使命となるのです。實に私共には世界を神國淨土とする使命があり、現代的に言へば世界を恒久の平和境として、全人類をして生を愉しませるの使命があるのです。從つて之が成就の中核たる實を具現し、その成就を行じなければならぬのです。此の事は日本國民の男女を問ふ處ではないでせう。

皇軍が滿四年も支那で戰つて居るのは、實にこの使命達成の爲めで、聖戰と言はれる所以です。

肇國の初め、かうした大宣言をした國が、世界の何處かにありますか。かかる理想、信念を以て國を肇めたところは絕對に世界にないのです。

八紘すくふ祖先のおほき念願われら果すべし時は來むかふ

天なるや祖先も鑑ませ寄諸とぐと吾等やむなくて兵を動かす
涙のみて祖先も戰爭したりけむ承けし寄諸の尊くかなし

皇軍は此の皇德宣布の行者です。吾等國民もまた皇德宣布の行者たるべきものです。

遐かなる皇國の道や行く貫くと軍出で征きていまだ旋らず

吾等には夫故決心を要します。

國たたかひ四年經にけり八紘宇となす思へば百年なにかは

だが大言壯語では仕方ありません。徒に氣位ばかり高くても仕方がありません。その實を具現することが必要です。ここで國家が中核たる實を發揮する爲め、高度國防國家體制を整へる事になり、國民にその具現を要望したわけです。國防とは國家を成立させ之を偉大圓滿に發展させることであり、同時に之を阻害し、之を崩壞させる諸因は悉く排除する

ことを含みます。

昔は、國防卽ち軍備と言つた狹い考へであつたが、今は違ひます。思想も、教育も、產業も、經濟もみな國防の質で、國防を負擔します。それ故政治外交は、國防の目的に運營されると言ひ得ます。此の事を個人に就いて言へば、吾等は皆國防人であるのです。その思想に、觀念に、知識に、技倆に、此の實がなければならぬのです。生活活動に於ても同樣で、國防力を阻害し、減退し、攪亂してはならぬのみか、益々之を强大にしなければならぬのです。卽ち婦人も國防を負擔して居り國防人であることを自覺して、生活し行動すべきことは言ふまでもありません。

このことは國家に於ける職業人に就いても言へます。從來の職業觀は個人主義的です。眞に國民の生活活動に必要な職業を、若し個人なり、會社なりがやらぬ場合は國家がやらねばなりませんでせう。それ故、個人や會社の仕事は國家の代行と、個人、會社も考ふべきであり、國家もさう考ふべきです。從つて私利私欲を貪る職業などはあつてはならぬわけです。從來かうなつて居たら、今更公益優先など言はれずに濟んだのでせうし、滅私奉

公などとも叫ばれずに濟んだのでせう。國民に一體觀の實があれば、滅私奉公でなく、育私奉公、完私奉公と言ふべきです。

これは大切な事と信じます。日本の國體では、私が國家に融け込んで居るのですから私を育て、私を完うすることが、國家を大にすることです。私を滅しては、國家は大きくなりません。日本人、日本婦人と言ふ自覺あつて私は尊く國家を大きくする爲め大生活、大活動を發展させる。ここに眞の靈贊が生れるのでせう。從つて私も認められ、私の自由も認められ、決して窮屈なものではないのです。然し從來の如き一體觀なき自由主張は否認すべきです。これは所謂自由主義、個人主義で、私の前に述べた一體觀に立つた自由とは大變な違ひです。職場に就いても同樣で、その勤める所を國家の代行職と考へる時、その職場の發展は卽ち國家の發展です。それ故茲に働く人々は國家の仕事に從事して居ると同じです、此の職場が然し未だ國家の代行機關と言ふ實のないものであれば、それはまだ新體制に應じて居らぬものでやがて改められるでせう。

吾等の家庭生活でも、國家內の生活でせう。從來の自由主義人でも日本人なら、私生活

と言つた言葉を、國家の認識もなく使用しては居ないでせう。家族主義國家の家族生活に、眞の自由主義の實現などは實際に有り得ぬと思ひます。從つて日本では、自由主義を生活理念として居る人のその家庭生活でも、個人主義國家の人々の家庭生活とは大變趣きを異にして居ます。

吾國の職場生活活動は勿論家庭の生活活動でも、國家內にあるのですから當然、外國的な自由主義ではあり得ませんのみか、國家の體制に從ふのが當然で、國防觀念が具現さるべきものです。

日本の婦人は本來は主婦として家庭人たるべきもので、よき子を產み、よき子を育て、よき家を築くものでせう。これ丈けでも大業です。職場の人となることは、その時、その家、その人の事情によります。本末は混淆してはならぬと思ひます。外國に是れあるから と言つて直に我國にも無かるべからずとは限りません。國體に合はぬものは、例ひ外國にあつても吾國には無くてよいのです。文化施設でもさうです。人を國を毒するものを文化施設とは言へぬでせう。從來の文化部門に屬する施設や人が、國を人を毒して居たものは

ないでせうか。日本國、日本人が、外國から、文化なる美名で毒を貰ひ、有難がつて、吾も呑み、人にも呑ませて居たものがないでせうか。私はかうした部分に働く人に大いに考へて貰ひたいのです。

愛は一體觀より湧く心持です。一體觀に出でぬ愛には獸慾があり、巧利があります。この一體觀からは愛の他に敬・信・慈等の心持が湧きます、是等は共に一體觀に立つた相對者の心持です。君臣・親子・夫婦・同胞間の一體觀が忠・孝等になるのです。夫故愛は吾國體に於て特に尊く重んずべき心持です。故に愛情を國民に高めることは極めて必要なのです。之を消衰せしむることがあつてはならぬのです。極端に言へば我國は愛情から成つた國と言へます。今の時勢がどうあらうとも眞愛を蹂躙することは決してあり得ません。またあつてはならぬのです。

唯だ從來の愛には、個人主義的なもの自由主義的なものがあります。純眞と言ふ漫然たる認識の下に動物慾の燃ゆる愛まで許して居り、又獨善的で國家・國民・家庭を無視した愛がありました。甚だしきには打算的な愛もあつたのです。戀愛などは頗る不純で、放漫

で悲慘でした。婦人は愛の權化などと言はれます。然し私は陶醉的な矜恃を否み、眞愛の發露を希求します。

をみならが生命をかけて戀ふといはばその欲るごとき男子いでむか

これは特に若き婦人に讀み考へて貰ひ度いのです。若き少女が戀の對象に就いて、自覺して欲しいのです。容貌や世才や、金錢を背景とせず、眞男子を戀して欲しい。國家を背景に眞男子を對象として欲しいのです。

婦人がかくなる時、そこに眞男子を出現させませう。かかる戀愛は、それ故個人主義でも、自由主義でもなく、國家の望むものでせう。

これと同じく、妻の眞男子愛は眞男子を、母の眞男子愛は眞男子を自ら育成し、出現せしめませう。これは愛國から生れる愛です。貴き愛です。夫故私は之を愛の翼賛と言ふのです。

八紘一宇に邁進する日本は自己自らが中核として活躍しなければなりません。中核が滅びたり、衰へたりして、どうして此の大業が完遂出來ませう。中核の修理固成が必要です。此の意味に於て新體制の徹底、支那事變の遂行、東亞共榮圏の確保が絶對に必要なのです。鼓に敢て苦難道に立つたわけです。然し個人主義・自由主義國家の無理解や、殊更なる妨害があるのですから、之を排除して一意、その成就に邁進する事の容易でない事は言ふまでもありますまい。

だが船は我岸の港を出で荒海にあるのです。

荒海に艦かぢそろはぬ船なしてわが皇國を漂はすべしや

打つて一團の熱鐵とならねばなりません。鼓に忍苦の生活も産れます。私共は寧ろ進んで忍苦の生活をすべきでせう。然る時苦は苦でなくなるのです。前途に光明を望んだ忍苦、希望のある忍苦、之は寧ろ愉快とも感じ得ませう。

暗澹にならないで欲しい。大和民族は、明朗清快な血が傳へられ、雄渾博大な氣宇の持

主です。私共も亦さう有る筈です。否此の場合特にさうあらねばなるまいと思ひます。家庭、男子活動力の發源たる家庭を明朗清快にすることは、時局乘り切り上特に必要です。生活の不自由にかまけて婦人が暗澹になつたとしたら、男子の活動力は精神的に減退しませう。母が暗澹になつたら次の時代を負ふべき子女はどうなりますか。明朗性を失はぬは勿論、健康性、建設性を此の際特に婦人に期待せざるを得ません。

世界情勢は如何に動くとも、日本の進路は決まつて居ます。不動邁進あるのみでせう。だがその前途には支那事變以上の難關が横はつて居ます。此の難關が堅く閉さるるに於ては、力を以て之を破碎して通過しなければなりません。焔の意志、鐵の力が國家に要求されます。私共に要求されます。

私は日本婦人を禮讃します。その默々たる底力に信頼します。日本建設、支那事變處理、東亞共榮圏確立の大業に與る婦人に大なる期待を持つて居ます。それ故此の機會に特に世界觀を新にし、日本觀に徹底し、人生觀を確持し、婦人夫々の立場に鑑み信念を以て行することを切望してやみません。

臣民道不變

「臣民の道」を讀んで

文部省編纂「臣民の道」は配布された。此の編纂は、文部省教學局が、萬全の準備を整へて、實際編纂に着手したのは昨年十一月と聞いて居る。そして現代日本の各部門各層代表が、頭腦を傾け、心血を注いで一言一句、一節一語を築き上げたものが本書である。內容は世界新秩序の建設、國體と臣民の道、臣民の道の實踐の三章と結論とからなり、懇切周到を極めて居る。

日本臣民の道は肇國の際より既に炳乎として明かであり、日本國體の萬邦に秀で萬邦に殊なる如く、日本臣民の道も萬邦に秀で萬邦に殊なつて居る。夫故肇國の精神に基き、國體に則つて、脫逸混沌することなくんば世界が如何に動き、日本が如何に之に對處しようとも、吾等臣民の道の根幹は微動だにあるべき筈はなく、千萬年に亙るとも又變化あるべき筈もない。

乃ち私をして言はしむれば、昭和聖世に於て更めて臣民の道を詳述させる如きは昭和聖世の臣民の恥辱である。

然るに今現實に此の臣民道を示さるゝを見ては吾人も亦更めて自己を反省し、自己を檢討しなければなるまい。かく觀ずる時、吾人は懼然として過去數十年、日本國民の臣民道に徹底せざりしことを恥づるものである。

教育勅語を奉戴して、吾人臣民の道は天地の公道と信じ、遵守之れ悖らざるを努むべきものが、いつしか西歐の思想にかぶれ、幾度か國體の明徵が叫ばれたるに關らず、天皇機關說が最高學府の憲法學者により宣布せられ、議會中心主義が臣民の代表によつて議場に叫ばれ、君主國　天皇親政の皇國に民政黨てふ政黨あつて疑はれず、臣民亦此の黨員となつて恥ぢず、民主國民が主張する自由主義が滔々として皇國を風靡し、文化人知識人は直に此の主義を理念として生活し活動すべきものゝ如く、國家の政治も亦基調を玆に置くが

如く、教育に、經濟に、法制に於て次第に國體を遠ざかり、皇國臣民の精神をして、不知不識の間に、その臣民の道を脱逸せしめたるの事實は、今如何に拂拭せんとするも不可能である。

かくして臣民の道の混沌はその翼賛の軌道を歪曲し、内は國政の透徹を缺き、外は外交の進展を妨げ、日露戰後三十數年、世界列强の排他的抗爭裡に、徒らなる足踏みを續けたのである。

私はもしこの三十年の間、皇國の臣民が、眞にその道を認識し、萬民一致鋭意これが實踐に邁進して居たら、皇國は今どんなになつて居たであらうかを思ふときに、感慨に堪へぬものがある。私は敢て言ふ。德川三百年、我が海外發展を抑ふることなくば、今の南洋は如何になつて居たか。日露戰後三十年、國民がその翼賛の道に混迷することなく、將來を透見して、不壞皇國の建設に邁進してゐたら、今のこの皇國民に課せられたる難問題は此處まで來らぬ前に解決して居たであらうと。

だが是は、死兒の齡を算ふるに等しい愚痴である。今皇國は喰ふか喰はるゝかのどたん

場に立つてゐる。かゝる愚痴を言ふ場合でもあるまいが、顧みて如何にも惜しい事をした。獨逸があのどん底より浮び上つて、今の勢力を築いたのは、二十數年足らずである。三十年をあゝして暮したことを殘念に思ふ吾人の涙の愚痴を、單に笑ひ捨つべきであらうか。

彼の高天原體制は、天神統治八百萬神翼賛であり、皇孫此の體制を以て、皇土に降臨遊ばされ、神武天皇この體制に從つて國を肇め遊ばされた。それ故我國は、肇國の初より天神の御子現人神天皇統治、萬民翼賛體制である。昭和の聖世、新國家體制なるが故の萬民翼賛ではない。千古萬古未來永劫君であり、臣は千古萬古未來永劫臣である。故に玆に發して天皇道が不動不變なる如く、玆に發して臣民の道も不動不變である。

臣民の道に徹底せんとすれば臣民の立場を知るを要する。この立場は、我國體を識り、君臣の關係に通ずれば千言萬語の必要もないと思ふ。而もこの國體を識り君臣の關係に通じ、天皇の大御心を拜承すれば、臣民に光榮、矜恃、歡喜が湧き、その臣民道の實踐具足の心が盛り上り高まるのであらう。

我國は君臣一體である。臣民は天皇に歸一する國體である。夫故臣民道はやがて天皇へ

の歸一道である。歸一の道は至誠を以て奉ずるにあり。臣民が天皇に生きるにある。故に眞に臣民道に徹するものは完私奉公である。卽ち天皇歸一に立つ私を育て、私を完成するひたすらなる努力が臣民道の實踐である。

至誠　天皇に歸一する心は天皇の御爲めにはその身を顧みぬ心である。此の心に基く努力は吾等をして眞の臣民道に立たせるものであらう。

海行かば水漬くかばね山行かば草むすかばね大皇の邊にこそ死なめかへりみはせじ

之は武臣の心構への歌である。然しながら、武臣以外のものも天皇の御爲め、顧みずにその職に斃れるのが、皇國の國體である。

皇國では個人も皆國家の仕事をして居る。個人主義的の私營私業ではない。從つて、私慾的な利益を貪るごときことはない筈である。國家が高度國防國家體制になつたから、公益優先になつたのでなく、皇國では素々斯くあるべきものなのである。

一度その各自の職業が、國家のそれである事に醒めたら、明かにこゝに「大皇の邊にこそ死なめ」の心が高まり、天皇の御爲めに不顧心が湧き、潔き行爲が生れるのであらう。

彼の宣命の中にも「顧みなき人等」とあり、萬葉集中防人の歌の中にも「顧みなくて」とか「顧みせずて」の語がある。これこそ日本精神であつて、天皇に眞向に向ふ心であり、歸一の純心である。天皇の御爲めとなれば、そこに何ものもない心である。

大伴家持は族を喩して歌つて居る。次の歌は單に大伴一族を喩したものでなく、實に皇國の一大家族人を喩したもの、卽ち皇國臣民を喩したものと言へる。

ひさかたの　天の戸開き　高千穗の　嶽に天降りし皇祖の　神の御代より　梔弓を
手握り持たし　眞鹿兒矢を　手挾み添へて　大久米の　丈夫武雄を　先に立て　靫取
り負せ　山河を　盤根さくみて　履みとほり　國覓しつつ　ちはやぶる　神をことむ
け　服從はぬ　人をも和し　掃き清め　仕へ奉りて　秋津島　大和の國の　橿原の
畝傍の宮に　宮柱　太知りたてて　天の下　知らしめしける　皇祖の　天の日嗣と

高千穂の農家

つぎて來る　君の御代御代　隱さはぬ　赤き心を皇方に　極め盡して　仕へ來る　祖の職と　言立てて　授け給へる　子孫の　いや繼ぎ繼ぎに　見る人の　語りつぎてて　聞く人の　鑒にせむを　可惜しき　清きその名ぞ　凡ろかに　心思ひて　虛言も　祖の名斷つな　大伴の　氏と名に負へる　健男の伴

反歌

磯城島の倭の國に明らけき名に負ふ伴の緒こころ勤めよ

劍太刀いよよ研ぐべし古ゆ清けく負ひて來にしその名ぞ

この歌には第一に祖先崇拜、家柄尊重思想があり、第二に忠孝一本思想があり、第三に名を重んじ家名を重んずる思想があるが、要は、皇國の國體に基きその傳統に從ひ、職場人として恥ぢざる最善を盡くすべきを勸めて居る。卽ち臣民道を明かにし、その臣民道を職場に實踐するべく激勵して居るものである。

本書は國體を說き、祖先の遺風を述べて、臣民道を明かにして居る。實に萬世一系の皇

収穫もすんだ秋の夜更け、家族が皆囲炉裏をかこんで干柿の皮をむく。炉には大きな切株が燃えてゐる。

室を奉じて今日に來つた、皇國臣民の心は一貫して居り、わが祖先の道は卽ち吾々の道であり、又子孫の道であるによるのである。

今國家は超非常時に際會してゐる、この超非常時の言葉さへ事實の前には切實味の乏しきを思はせる。或は皇國の生か死かの岐路にあるといつてもよい。喰ふか喰はれるかの場合だといつてもよい。こんな事態が曾て皇國にあつたか、有史以來未曾有の事態に際會してゐるといふのは決して誇張でも何でもない。これを惟ふ時現代吾々皇國臣民に向つて、その臣民道を明示され熱列な、そして徹底的な實踐を要請されるのは蓋し消極的救國の道も、積極的興國の道も、一に繫つてこの現代皇國臣民がその本然の道を不顧の心を以て實踐する外、他にこれを求め得ぬからである。

皇國は今既に八紘一宇の大使命に向つて起ち、戰ふこと四年、而も支那事變は何時終結を見るか分らぬのに、敵性强力國家は我を包繞して、この大業の遂行を妨ぐるのみでなく、根柢的に皇國を擊滅せんと企圖してゐる。

八紘一宇の大業は中核日本あつて而して望み得べく、日本なる行者あつて始めて、世界

救濟の大法は宣布出來るのである。

その日本が中核、行者として存在し得ず、その實力を缺くにおいては、大業の完遂の如きは一場の夢に終るのみか、三千年を傳へられた皇國の生命は、吾等現代臣民においてこれを斷滅するが如き結果に到らぬとも限らぬのである。

故に今吾等臣民は斷々乎として、不壞の皇國を建設しなければならぬ。そして既に着手しつゝある八紘一宇の大業を完遂しなければならぬ。

この故に吾人現代臣民は、吾人の祖先より、更に更にその臣民道の實踐において徹底的であり、全身的であり、一心不亂であらねばならぬ。苦しかつたら痩我慢をしてでもやり通さねばなるまい。こゝに活路があり伸び行く道がある。

私をして極言させたら、國民全部捨身の精根を盡す秋だと思ふ。劍道の極意は「身を捨ててこそ浮ぶ瀬もあれ」と敎へる。私は今こそ臣民がその全財物を、全生命を、天皇に捧ぐる覺悟の實踐が必要だと思ふ。

倫理でなく、道德でなく、臣民道の行である、口頭禪が人を救ひ得ぬ如く、臣民道を理

智に止めてしまつては、國家を濟ひ興すことは出來ぬ。今はこれを行ずるのみである、之を行ずるは、臣民が之をその日常の生活と活動とに發展させることである。現在臣民の生活、活動は必ずしも臣民道の純眞な顯現とは思へぬ、そこに尙自由主義、個人主義の殘滓がある。そこに尙傳統的餘弊との妥協がある、そこに尙不顧の眞劍さが足らぬ。かくのごとき人々と雖も、皇國民てふ自覺は持つてゐる。これを持つてゐながら、その臣民道實踐がかくなまぬるいのは恐らく現下の情勢の認識不足に因するのであらう。故に眞に現下における皇國內外の情勢を認識せしめたら、皇國臣民たる以上自肅自戒の消極的實行を超え、更に一大決意を以て、不壞の皇國建設に不顧捨身の努力を傾倒すると思ふ。

だが悲しい哉、爲政者も指導中樞もこれを明々白々に臣民に知らせることの出來ぬ事情があると思ふ。この苦しさを吾々臣民は察しなければなるまい、察して而してその要求するものを我から盛り上げねばなるまい。

「臣民の道」一篇、之を活かすことこそ、我等が皇國の生命を無窮に傳ふる所以であることを讀後の感として切言する。

み民われ生ける甲斐(しるし)あり日本に歴史(ふみ)ありて未曾有の秋に遭へらく

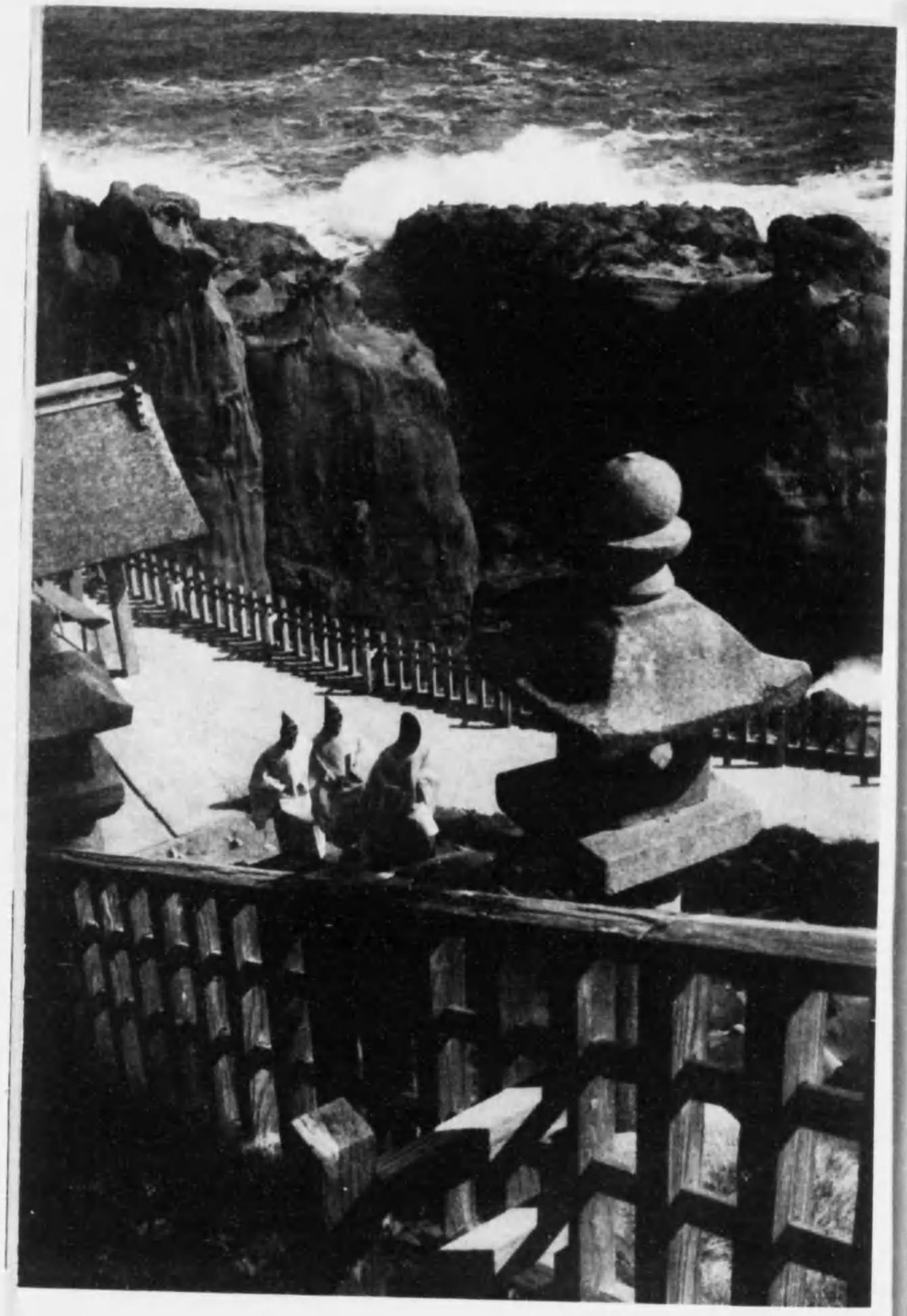
拙歌である、私はかく感じて老軀に鞭うつてゐる。

第三編

記紀の精神

私は心の鬱屈を覺える時は、古事記か、日本書紀を繙く。そして多くの場合、左記、神武天皇の勅を拜誦する。

『我れ東を征ちしより茲に六年になりぬ。皇天の威を賴りて、凶徒戮に就きぬ。邊土未だ清まらず、餘妖尙梗しと雖も、中洲の地に復た風塵なし。誠に宜しく皇都を恢廓め大壯を規摹るべし。而して今運屯蒙に屬ひ、民心朴素なり。巢棲穴住、習俗惟常なれり。夫大人の制を立つ、義必ず時に隨ふ。苟くも民に利有らば、何ぞ聖造に妨はむ。且た當に山林を披拂ひ、宮室を經營りて、恭みて寶位に臨み、以て天元を鎭むべし。上は則ち乾靈の國を授けたまふ德に答へ、下は則ち皇孫の正を養ひたまふ心を弘めむ。然して後に六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇と爲むこと、亦可からずや』



宮神戸・鵜

六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇と爲むこと亦可からずやのくだりは繰り返すことにして居る。繰り返して拜誦して居ると、神武天皇の御英姿が私の眼の前に現れ給ふのである。

八紘一宇の語は、今は津々浦々の小兒も熟知して居よう。滿洲國の建設も、東亞の新秩序も、共榮圏の確保も、獨伊との同盟も、畢竟この八紘一宇の大抱負によつての、皇謨と拜察する。從つて吾等國民は此の皇謨を翼贊し奉る爲め粉骨碎身しなければならぬ。氣宇は、雄渾博大、心は金剛不壞でなければならぬ。

天なるや祖先も鑑ませ寄託とぐと吾等やむなくて兵を動かす

だが波風は荒い。

八紘宇となごみて日本よ國の父母よと仰がるるやいつ

前途は遼遠だが、吾等不屈不撓の精神はきつと此の秋を招來すると信ずる。國家は今新

紺碧に輝く日向灘の波に洗はれ蘇鐵の原生林に圍まれた洞穴に日子波限建鵜草葺不合尊の神話を秘めた鵜戸神宮に詣でると、我々日本民族は本來海洋民族たることをしみ〴〵感じさせられる。晴れた日には祠の前をいるかの群が悠々と泳いでゐる。

體制に移り、船は港を出でて、狂濤の大海にある。

荒海に艪梶そろはぬ船如してわが皇國を漂はすべしや

眞に一億一心、萬民翼賛の秋である。彼岸に到達しなければ、我國の悠久性を保證し得ぬ。私は天壤無窮の神勅を確信する。そして悠久性確保の爲め一路邁進せんことを誓ふものである。

或はわがみ祖の國か南の地圖見据られば血潮たか鳴る

私は古事記にある鹽椎神を思ひ、綿津見神を思ひ、天津日高日子波限建鵜草葺不合尊の御母、豐玉毗賣尊を思ひ、我等に南方遠き海彼に在ましし祖先の血潮の傳へられるを疑はぬものである。

『來よ』と呼ぶ聲が聞え、來よと招く姿が見えるやうだ。

力なくばただに在るさへ否まるるこの現實は蟲けらも知らむ

我等に力あり、我等に自信あり、我等に……

捧げまつる吾等が血肉惜しむなし築かせたまへ不壞の皇國を

脅迫も威嚇も、覺悟の前には恐るるに足るまい。東海の狂濤或は皇國の岸壁にその飛沫を注ぐ盲動を敢てせぬとも限らぬ。

大東京嘗て焦土と化したりしが魂消えて誰か心碎けし

吾等は既に斯くの如く災厄は經驗濟みである。心の準備成り、冷靜と沈着とを以て對應宜しきを得れば、吾等の底力は勃然として、新たなる飛躍を展開させるであらう。

だが、吾等はかゝる災厄を未然に防ぐを忘れてはなるまい。

荒魂息吹威ぶらひ吹き消たむ禍火狂ふ皇國に對ひ

私は信ずる。斷乎たる決意を以て國家が打つて熱火の一彈とならば、禍火は彼れ自らその毒焰を收めるであらうことを。

私はまた一方に和魂を以て、吾等の眞精神を世界に宣布するを要すると思ふ。即ち世界の全民族に、吾人と同じ一體觀思想を抱かしむる爲め、敢て皇道と言はず、皇道の精神を世界學として組織し之を普及せしむるのである。眞の世界平和は世界民族がかくして、吾人と同一の一體觀思想を抱く時に於て希求し得るであらう。又我國の提言も行動も世界民族に容易に理解されるであらう。我自ら天兵と言はず、彼等が迎へて天兵來ると言はしめてこそ八紘一宇の大抱負實現も容易となるであらう。それ故世界新秩序の確立に起つた日本が爲すべき緊急の業務の一として此の世界學の樹立とその普及とをここに提唱する。

國民的教養

萬葉集に、葦原の水穗の國は、神ながら言擧げせぬ國と言ひ、又言靈の佐くる國と言ひ、或は言靈の幸はふ國と言つてゐる。これは實に我祖先の言靈思想で、言語には、靈があり、生命がある。それ故常に靈動して吾人の仕事を佐け成し幸はうて呉れる。故に一度言語を發すれば、必ず實現せらるべきものである。これは神意にもとづく、故に輕々に言擧げをしてはならぬ。一度言擧げする以上、そこには誠心誠意その實現を期すべき責任が伴ふ。また誠心を以て言擧げした言葉は、言葉の中に生きて働いてゐる靈の力で、佐け成され幸せられて必ず實現される。それ故言擧げは眞に必要の場合誠心誠意を以てする。即ちまことある行爲こそ眞の行爲であり、眞言はよく眞行となる。行となり得る言こそ眞言である。行たり得ない言は愼んでこれを發しない。まことに滿ちた言葉は即ち言靈であり、かゝる

言葉は大いなる働きをもつものであつて、限りなく強く極みなく廣く通ずるものである。

言靈思想、これこそ日本民族が本來、不言實行的であり、自己の行爲は、神の意志發露であると信ずる民族であつたことを證するものである。

かゝるが故に實行に斷があり、熱があり、信念があつた。そして言說と行爲は不二一體であつた。かゝる事の根本は實に吾人の祖先が神であり、吾人も誠であり眞であれば神に歸一し得るといふ信念があり、誠なる場合、眞なる場合の自己を恰も神の如く信じたるが故に、玆に自己の行爲に神の行爲を感じたからである。自己の行爲は即神の行爲、かく感ずる處、そこに信が生じて迷ひなく、勇が生じて退くなく、斷々乎として所信を遂行する。

現代日本人の、言說に終つて實行力なきは、蓋し歐米輸入の思想、學問によつて日本本來の神人不二たる一體觀を失墜したるに、その大原因があるものと思ふ。

故に行動力を喪つた知識人に代るべき新しき時代の人には、この神人不二の信仰を得せしめねばならぬ。神を指導精神とする本然の日本人たらしめねばならぬ。この日本本然の信仰を失つては、眞の行は產れぬ。必要論からでは眞の行に徹底せぬ。

この故に眞に日本の國體を、そして肇國の精神を體得せしめ、世界觀を確立させ、國家觀に立つた人生觀を把持させることが緊切である。

生活力の旺盛なるを要することは言ふまでもない。故に常に勃々として、精神に、肉體に、その力の充溢し在るの實あらしめることである。行動を推進挽曳で實現させることは駑馬に鞭うつの類である。駿健なる馬に拘掣を必要とするまで奔逸する。その力を充溢せしむれば自ら行動せざるを得ぬものである。故に行動源として强健な精神と肉體とを養成することが必要である。

眞智は迷はずと言ふが、凡智は智あるがために迷ふ。學問的の智は眞智でない。故に迷ふ。迷はざるまでも八方考慮、却つて斷を缺くに至る。過去の戰爭に於て、平時の戰略戰術の智者が統帥する軍の行動が常に澁滯せるの實例多く、正に此の例證とすることが出來る。

それ故、科學智識偏重の從來の教育は之を排すべきこと多言を要すまい。

眞智は科學の智ではない。之を超越した大觀智である。大勢大局を洞見し施す術を辨ずる智である、詮索を脱して直感の域に達した智である。故に將來の教育に於てはかゝる眞

智を得しむる如く發展せしむるを要する。

從來の自由主義的教育の結果は、義務心、責任感を稀薄ならしめた。積極より寧ろ退嬰的ならしめた。夫故、此の自由主義的な教育より脱し、責任感を强盛にし、大いに積極的な教育を施さねばならぬであらう。

軍隊の教育は百事戰鬪を基礎とする。故に優秀の行動を實現する。今日吾人の生活は流血の慘なき戰鬪である。この社會生活に勝利を得るためには卽ち軍隊教育の如く精神、智識、肉體の行動に仕事に優秀なる如く發展せしめねばなるまい。こゝに机上の俯學と共に、大地の上に、職場裡に實習鍛錬を盛んならしめねばならぬ。故に歸結するところは行にある。行こそ將來の國民の教養に求むるものでなくてはならぬ。

私は前に世界觀、國家觀、人生觀の把握の必要を述べた。是はやがて日本人吾等の使命に徹底することである、雄渾博大の氣宇、明朗快濶の性格、進取建設の意氣もかゝる所に生ずる。國民的教養は、それ故にこゝに基礎を置き、行の蓄積を以て發展を遂ぐべきであらう。

夢現往來

皇國の活きゆく道とうたがはず死もて護るらむ兵の一人も

昭和六年九月十八日。支那正規兵、柳條溝のわが滿鐵線を爆破し皇國遂に起つた時、私は來るものが來たと思つた。當時、滿洲の狀態は日本勢力が日に日に減退し、支那の橫暴はますます加はつて來たのに、わが國には滿洲放棄論さへあつた。それゆゑ、この滿洲に皇軍が起つたことは、國內の人心を刺戟しその成行きを憂慮するものもあつて、時の朝鮮軍司令官が獨斷滿洲へ出兵したことを非議するものさへ現れた。

殊に國際聯盟が囂々と狂躁の聲をあげたので、日本が孤立に陷るを恐れるものも現れて來た。それかあらぬか、熱河作戰が一時中止された如き奇現象さへ出來た。

戰友らはや師團長となりぬ滿洲に征き戰ひぬ吾は歌よむ

私はすでに豫備役にあつたので、從軍も出來ず、腕甲斐なくも作歌に心を慰めてゐたが、國際聯盟の狂躁が癪に障つてたまらぬ。滿洲は日本の生命線と信じてゐた私は、といつて、唯一介の在鄕軍人である。鱶の齒軌りにも等しい憤慨を、せめてもと短歌に漏らす外なかつた。

餓もこよ死も來れよ斯の道をゆきとほさずば國はたたずも

いきの生命まもる吾等をゆるし得ずば打ち碎くべし避くとせなく

に

戰ふもたたかはざるも死ぬべくばわれら男子は戰ひ死なむ

だが國際聯盟が如何に騷いでも眞先きに起つて日本に戰爭を挑む國があらうとは思はれない。彼等が口にする經濟封鎖さへ、さうやすやすと出來るものではないと信じてゐた。

遠のきて強き言いへ皇國にまともに戰爭いどむ國ありや

といつても私は時々妙な幻影を見ることがあつた。それは米國や英國の飛行機がわが國土の上空に飛來し爆彈を投下する景況であつた。

闇の底にひそみ息づく吾等の上に敵爆擊機の音ぞ落ち來る
全市滅燈のサイレン鳴りやみ大東京闇に息ひそむこのたまゆらを

そして怒濤を衝いて驀進を續ける敵の渡洋大艦隊が眼に浮んだ。だがそこにはまた他の幻影が、私を喜ばすのであつた。

海の底に勇名なすわが潛航艇敵艦襲ふ見ゆ眼の奥に
爆彈もち敵艦の上に落ち爭ふわが飛行機と豈知るらめや

滿洲事變は、然し事變としてのみ終らず、皇軍は外に連戰連勝の輝かしさを示したが、

銃後國家は從來存在した病根の所在をいよいよ暴露することになつた。

個人木堂を惡むものあらずしか思ふにその木堂は殺されにけり
炎々ともゆる業火に合掌し滅びゆく世に殉ずべきかも

若き丈夫は病根を法廷で指摘した。それで私はこの外科的手術が必ず偉功を奏するものと思つた。

この若き丈夫あまた犧牲にして救はれ得ざる國と思はず

だが私の期待は達成されたであらうか。咽喉元過ぎれば暑さを忘るる。一時の興奮も惰性の深く強きを如何とも出來ず、病根はなほ國家から除かれるに至らなかつた。私は講演のため全國を行脚しまた神社、佛閣に參拜した。

天つ日の光をとさす岩屋戸を碎く手力男今もあらぬかも

これは信州戸隠神社に詣でた折の作である。だが國難緊迫の聲のある一方、國内には軍の大豫算をのらふ聲、軍横暴の聲さへ聞えた。

危期といひ然らずといふわれらはや弄ばれて幾日あり經る
國の豫算大方軍にとられしといふこの言の影響を恐る

私の血潮は時にしきりに高鳴るを覺えた。國の内には外交をうまくやれば軍備などさう充實せずともよいと論ずるものもあつた。實力の背景なき外交は犬の遠吠に等しいと信じてゐる私にはあまりに心外であつた。

戰備すでに成れりと高叫ぶ聲きこえずや海の彼方ゆ
後れざる備をだにも許さずて勝つを强ひらるる軍あはれなり

然るに政爭は國の弱點を海外に暴露し、内國民の生活をいよいよ窮迫に陷し、農民や中小商工業者に怨嗟の聲を生ずるに至つた。私は農村を巡つてその生活に哭した。

恰もや底なき井戸に水滿たす苦惱をして終ふる一生か
百姓等おのが生業を呪へども說き訓しがたし吾は所以知る

地下に暗流が湧き、時に湍ち騷いだ。妖暗を通る魔の呪の聲が人心を益々不安に陷した。

明けくすでに明けき國體ぞなにしかも敢て明けくせむ

私は時に私を哀れに思つた。講演などに馳驅して健康を害するより、悠々自適するの勝れるを思つた。面白く可笑しく此の世を終る方が賢しとも思つた。

講堂におのれはずみてあはれなりのぶとき聲もからしはてたる

持つて產れた性分は自分にもどうにもならぬものと見える。

國家改造、新政治體制要望の烽火は、遂に帝都に若き將校によつて擧げられた。私はこの烽火に油を注がねばならなかつた。

眼を耳を口を塞ぎ居り三匹の猿を兼つと憐れまむかわれ
手を足を自ら封じ似るといへど達磨はかかる泣顔ならず

俄然として支那事變は起つた。或る者はその意外に驚き周章てたであらうが、これは當然起るべき滿洲事變の餘燼の燃え上りであり、地下に埋められた爆發物の發火溫に達した結果でもある。然るにその火焰は日本の欲せざるに關らずますます熾盛となり擴大して仕舞つた。これはこの火に油を注ぐ援蔣國家群を排擊せず、火のみを消さむとした、滑稽にして矛盾せる措置の當然の結果である。國民生活をかくも窮迫せしめたものはそれゆゑ、國內にある援蔣國家群容認者、殊に英米和親主義者で、もしドイツであつたらこれ等の人人は利敵行爲をあへてしたものとして國家の嚴罰に附するであらう。

皇國の民とし生れてあだ國の傀儡と躍る人ありにけり

この歌はさうした人を歌つたのではない。然しこの歌は面白い解釋が出來る。「と」の一

字を「となりて」と解くことと「と共に」と解することによつて二樣になる。歌が拙いからこんな二股膏藥に役立つと思へば、作者の私は苦笑を禁じ得ぬ。

近衞公は遂に輕井澤を出發した。內閣は成立した。そしてラジオでかつて五・一五や二・二六事件を起した將校のいつたごとき放送をされた。

新政治體制、國防國家體制、夢ではない。戰友の靈よ、聞いてゐたか。見守つてゐるか。

今日のこの勝を願へばわが戰友等國內に起ちて死に去りしかも
今日の勝を敢てひらきし戰友は死に人は忘れてあはれみもせず

夢現は私の頭の中をしきりに往來する。

霧島の平地・高千穂峰

わが悲懷

歴史を讀んで、藤原仲麿を逆臣と知つて居た私は、後に萬葉集を繙いて次の歌を發見した。

いさごどもたはわざな爲そ天地の固めし國ぞやまと島根は

之が彼の仲麿が內裏に於ける肆宴時の詠と知つて、迷はざるを得なかつた。かうした歌を詠む仲麿が、どうして逆臣とされたか。私は今這裡の消息を敢て想像することを恐れる。更に末期萬葉の代表歌人、大伴の宗家、家持が、一度はその反逆に關係したとの理由で位官を失つて居ることを知つて驚いた。家持には有名な長歌がある。

ひさかたの　天の戸開き　高千穗の　嶽に天降りし　皇祖の　神の御代より　梔弓を

手握り持たし　眞鹿兒矢を　手挾み添へて　大久米の　丈夫武雄を　先に立て　靫取り負
せ　山河を　磐根さくみて　履みとほり　國覓しつつ　ちはやぶる　神をことむけ　服從
はぬ　人をも和し　掃き清め　仕へ奉りて　秋津島　大和の國の　橿原の　畝傍の宮に
宮柱　太知り立てて　天の下　知らしめしける　皇祖の　天の日嗣と　つぎて來る　君の
御代御代　隱さはぬ　赤き心を　皇方に　極め盡して　仕へ來る　祖の職と　言立てて
授け給へる　子孫の　いや繼ぎ繼ぎに　見る人の　語りつぎてて　聞く人の　鑒にせむを
可惜しき　清きその名ぞ　凡ろかに　心思ひて　虛言も　祖の名斷つな　大伴の　氏と名
に負へる　健男の伴

磯城島の倭の國に明らけき名に負ふ伴の緒こころ勤めよ
劍太刀いよよ研ぐべし古ゆ清けく負ひて來にしその名ぞ

これは家持が族を喩す歌である。族を喩して忠誠を勵ます家持自身が、なぜに反亂に與したなどと見られたのか。

家持が思想、信念人でなく、單なる、短歌製作者であるなら知らぬ。然し私にはさうした家持とは思へぬ。

然し家持は、その後許されて居るので、或は以前の嫌疑は晴れたのであらう。それにしても一時、何故にかかる不利の立場に立たねばならなかつたか。

保元、平治の亂、平氏盛にして源氏討たれ、源氏榮えて平氏討たれた遠き史實はとも角も、近く徳川氏の天下となつて、彼の石田三成は奸賊の如く取り扱はれ、由井正雪は反逆人とされて居る。

勢力に阿つた記錄、當時の爲政者が作つた歴史が、如何に後代を迷はすか。大義名分を暗からしむるか。

かの坂下、櫻田門の志士も、明治維新が無かつたら、徳川氏本位の歴史によつて何とされて居たであらう。

時の最高權威者が單なる自己擁護の記錄を以て、之を後代に强ひんとしても、後世の史家に正澄の史眼あれば、それは憐れむべき誤謬である。とは言へ、正澄の史眼を後世に俟

つは悲しむべき事に相違ない。

私は明治維新史を讀み、彼の天誅組の事に及んで、常に流涕を禁じ得ぬ。

彼は錦旗を奉じて居る。天意を以て奸賊を誅せんとして居る。天誅組、誅に服す。かうした事があつたのだ。

私の眼には彼等が、尊王の大義に燃え、錦旗を飜して意氣天を衝く颯爽たる英姿が見える。それが忽然と變り、そこには、錦旗を捲いて北方を仰ぎ涙を垂れ、奥齒を嚙んだ憔悴無殘の一群が現れ、そして更に訴へんとして訴へ得ず、談らんとして談り得ず、圓坐自刄の哀れむべき幻が、且つ消え、且つ現れる。

廟議數々變る。史上の文字は短いが、その蔭には、悲喜、榮枯、死生の轉換がある。

薩と言ひ、長と言ひ、土と言ひ、肥と言ひ、越前、會津と言ふ。戰國時代の如く覇者たるの野望なく、至誠眞に皇室に忠ならば、上に朋黨なく、相克なく、排擠なく、下去就に迷ふなく、憤死、呪死、悲死も從つてあるまい。又弓矢折られ、良狗屠らるるの矛盾も生じまい。

君國を累するは今も昔も、巧利榮達を求むる野望者の謀略、跳梁が大義名分の美名下に行はるるに因るものが多い。

彼の、勝てば官軍敗くれば賊の語は、何時、誰によつて造られたか。かうした忌むべき觀念が假りに明治以前にあつたとしても、昭和の聖代は勿論、將來永遠に再びあらしめてはなるまい。蓋し我肇國の精神濁らず、國體儼として明かに、天つ日嗣永へに、一系の天子上にましますに於て、輔弼の臣濫りに勢權を專らにし、國憲に藉りて利心を逞くするが如き者なくんば、かゝる勝敗によつて、官賊の轉換があらう筈はない。

棺を蓋うて忠奸定まるを言はせてはならぬ。光明を將來の歴史に期待せしめてはならぬ。大義恒に明かに、名分寸時も紊れないならば、忠臣は現前より、死後に亘つて忠臣であり、奸賊は現在も將來も奸賊であらう。

歴史はその國の生命である。正史なくしてどうして、その生命を純眞に存續繼承せしめ得るか。吾等に三千年の歴史がある。之あるが故に無窮の生命は約束される。

實に正史は、正しき資料、正しき筆を要し、神明の嘉納を要する。吾人の祖先が吾人を誤らしめぬ如く、吾人も亦子孫を誤らしめてはならぬ。現代に生くるものは、夫故邦家の爲め正しき資料を後世に遺し傳へねばならぬ。彼の正しき資料を陰に壁中に匿藏して、後世を俟たしむるが如きは、實に當代の明且つ正なるを信じさせぬに因るものであつて、方に勢權者に對する一大侮辱と思はねばなるまい。

實に神國日本の歴史は、私筆を以て汚さるべきではない。神皇正統記、大日本史、之を誌したるは、私筆にして私筆でない、神明その人の筆を藉る故に神筆と言ひ得よう。

私は何を書く積りで筆を執つて此處まで來たのか。私に課せられたものは「私の悲懐」それであつた。「私の悲懐」、筆は蕪雜に散亂した。之は私が筆の人でない悲しさだ。

あまのじやく

意地悪、旋毛曲などを、「あまのじやく」と言ふ。地方によつては「あまんじやく」とも言ひ、私の郷里などでは「あまねじく」と言ふが、何處から出た語かを私は知らぬ。それで試みに辭書を繙いて見ると、

「あまのじやく」或は「あまのじやこ」とは「きたたき」を言ふとあつた。「きたたき」とは啄木鳥のことで「けら」などと言つて居る。あの木の幹に孔を穿ち、その中の蟲を喰ふ鳥である。あの鳥は美しいが、木を敲く音は淋しい。

これではあるまいと思つて他の辭書を見ると、

「あまのじやく　あまのざこ」に同じ、蟲の名、地下に一分許りの穴を作りて棲む、燈心を油に浸して入るれば、付きて出づ、長さ一寸許り、黄白色にて首は赤黒し、形むかでの

如く、背に二つの封ありて駱駝の如し、一名「地むし」とあつた。何だ地蟲かと、之は私を吹き出させて了つた。いや是でもあるまいと更にまた辭書を繙くと、

「あまのざこ」（天探女の訛）殊更に人の言に逆ひ、己が心のままに振舞ふ者、「あまのじく」とあり、又誤つて兩金剛の踏まへる小鬼の稱「天邪鬼」の轉かとある。これはどちらも意地悪、旋毛曲らしい。天邪鬼などは文字そのものが、直感的に最も當つて居るやうに思はれた。

天探女なら、日本記にある、高天原から、葦原中國に言趣の爲めにお遣しになつた、天稚彦が同地で顯國玉の女、下照姫を娶つて、そこに住み、歸還せぬので、更に高天原から樣子を見せに遣はされた無名雉を射つて斃すべく、天稚彦に勸めた不埒女である。

天探女、地上に在つて、天探女は一寸受け取れぬので變だと思つたが、攝津風土記を見ると是は明かに高天原から、矢張り盤楠船で此の國に下つた事を知り得た。そして探女の文字で、此の女も高天原の女間諜で、矢張り葦原中國を探る爲めに下つたものであらうことを想像した。女スパイR何號と言ふに當る。神代でもスパイに女を使用した。恐らくこ

れが女スパイの元祖であらう。その高天原の間諜が、なぜ天稚彦に無名雉を、射たさせたか。反間苦肉の策か、どうも、さうとは受取れぬ。とすれば、天稚彦の如く、此中國に戀を得て寢返つたのかも知れぬ。戀仕掛けで成功したスパイもあるが、戀の爲めに責任を全うし得なかつたスパイもある。天探女は戀の爲め、大事な任務を忘れたのみか、却つて第二のスパイ無名雉を殺さしめた。不忠、不義な女である。と言つて意地惡、旋毛曲とは一寸違ふやうだ。

第二スパイ無名雉は可哀さうに、天稚彦の門の柱木になど止まり正直にその使命を喋つたので、此の鳥は鳴く音甚だ惡しなどと言はれて射殺されて了つた。雉も鳴かずば射たれまいに。

春の野にあさる雉の妻戀におのがあたりを人に知れつ　（萬葉集）

天探女は戀の爲めに寢返り、無名雉は、喋つた爲めに天探女に謀られた。愼むべきは戀、戒むべきは饒舌、などと感じたが、之を脫線と知つて、矢張り彼の兩金剛に蹈まへられた

小鬼から「あまのじく」は出たのかと思つたが、私は此の小鬼の性格が果して意地惡、旋毛曲かどうかを知らぬのだ。然し天邪鬼の文字で、さうだと承認して良いであらうか。或る書物に猶太經典から見て西部亞細亞の「エドム」に住んだ「エサウ」族は東進して日本にも來、「蝦夷」となつた。その「エサウ」族は彼の「イスラエル」の暴君「アマンジヤ」の爲めに國を滅ぼされたので、その怨骨髓に徹し、此の暴虐無殘な「アマンジヤ」を「エドム」の人の子孫が口々に傳へ、東方日本に來た後も「アマンジヤ」を呪つて、そしてその「アマンジヤ」が何時か轉じて「あまねじやく」「あまんじやく」になつたのだと言ふ。面白いとは思ふが、果してどんなものであらうか。

この書籍の著者は日本民族を彼の中央亞細亞に發生したものとし、高天原を、彼地の「タガルマ」の「ハラ」と言ふ所だと言つて居り、東京の舊名江戸は「エドム」に因んだもので、アイヌ語であると言つて居る。

「あまのじやく」が天邪鬼なら、その姿も表現されたものがある。然し私が幼時人から聞いた「あまのじく」は丁度河童のやうで、あの頭の皿が口になつて居て、ここで物を喰ふ

と言ふのであつた。頭のてつぺんに口があるのだ。誰がこんなことを考へたものか。

「あまのじやく」が文献では古事記、日本書紀、舊約聖書に及び、歴史では日本神話、希伯來傳説に、地理では中央亞細亞、高天原、葦原中國日本に、そして鬼、人間、鳥、蟲と言つた、私には到底扱ひ得ぬものらしくなつて了つた。それで私の「あまのじやく」はこの邊で顧ひ下げにする。

信は力なり

戰陣訓の本訓其の一に必勝の信念が説かれて居る。

『信は力なり。自ら信じ毅然として戰ふ者常に克く勝者たり。

必勝の信念は千磨必死の訓練に生ず。須く寸暇を惜しみ肝膽を碎き、必ず敵に勝つの實力を涵養すべし。

勝敗は皇國の隆替に關す。光輝ある軍の歴史に鑑み、百戰百勝の傳統に對する己の責務を銘肝し、勝たずは斷じて已むべからず』

又歩兵操典には此の必勝の信念に關し次の如く説いてある。

『必勝ノ信念ハ主トシテ軍ノ光輝アル歴史ニ根源シ周到ナル訓練ヲ以テ之ヲ培養シ卓越ナル指揮統帥ヲ以テ之ヲ充實ス

赫々タル傳統ヲ有スル國軍ハ愈ゝ忠君愛國ノ精神ヲ砥礪シ益ゝ訓練ノ精熟ヲ重ネ戰鬪慘烈ノ極所ニ至ルモ上下相信倚シ毅然トシテ必勝ノ確信ヲ持セザルベカラズ』

即ち兩者略同一の說き方である。眞理に差別はない。表から說いても、裏から說いても歸する所は一であらう。

是は軍の戰鬪を標準に說いたものであるが、今は總力戰時代である。高度國防國家に相對する時だ。今戰鬪の目的が、敵を破碎殲滅するにありとせば、此の相對國家の場合も亦對者を破碎殲滅するを最後とし、少くとも彼を屈服、從屬させるにある。それ故此の戰陣訓に摸して、國家本位に書いて見るも面白い。

『信は力なり。自ら信じ毅然として戰ふ（爭ふ、競ふ）國家、國民こそ常に克く勝者（優者、榮者、盛者）たり。

必勝（必優、必榮、必盛）の信念は千磨必死の國家國民の訓練に生ず。須く寸暇を惜しみ肝膽を碎き、必ず相對國家國民に勝つ（優る）の實力を涵養すべし。

國家國民は光輝ある皇國の歷史に鑑み、金甌無缺の傳統に對し、現代國家國民の責務を

肝銘し、勝たずば（優らずば）斷じて已むべからず』

かくする時戰陣訓は卽ち國家國民訓たることになる。

必勝の信念は實に無敵信念であつて、國民は精神に於て、肉體に於て、技倆に於て、活動に於て他國民に優越し、國家は團結に於て、統制に於て、亦他の國家に優越するより生ずる信念である。卽ち優越感と優越性優越力の體得が必要である。

玆に千磨必死の國民的、國家的の敎養訓練が必要となる。眞劍死線に立つての研磨砥礪が必要となり、艱苦缺乏に超然として立ち、百折不撓の勇猛心を涵養し、縱から橫から、天から地から來るものは來よの綽々たる餘裕が自ら湧く底の境地に、國民も國家も在り得ねばならぬ。そして、進んで國民國家永遠の爲めに難局に必勝の信念を以て邁進し得なければなるまい。現下の時局程、國民國家に必勝の信念の實を要望する秋はあるまい。

國家對國家の場合でも、民族對民族の場合でも、更に他の競爭場裡に立つ團體でも、個人でも、勝を願ひ優るを欲する場合に於ては、等しくこの必勝の信念自ら生るるの、實力の蘊蓄が必要である。故にこの戰陣訓はまた處世訓でもある。

信は力なり。私に歌あり。

力なくばただに在るさへ否まるゝこの現實は蟲けらも知る

底力

日本があの露西亞と戰つた明治卅七八年當時のことを、すでに五年も獨力で支那と戰つてゐる今と對照して見ると全く驚かずには居れぬ。當時僅か二年足らずの戰爭をやるに戰費の過半以上を外債によつたなどは嘘のやうな事實である。今考へて見ると、英米が日本に肩を持つたのも、親が子供に對するやうな心理であつて、弱少國であつた故、物好きも手傳つたと見ることもできよう。つまりは哀れまれたやうなものであり、勝つて見ても大したこともないと見くびられてゐたやうにも思はれる。

今はそれが違つて、日本の强大となることは理が非でもいやなのだ。理窟以上のものだ。その理窟以上のものに理窟を言ひ聞かすなどは、野暮と言へる。その野暮を繰り返して居るのは何處の國かなどと言ふのはなほさら野暮である。

いゝ加減に見きりをつけて、先方がどうあらうと吾は吾が欲するところに邁進する方が賢明であらう。

英米などはほんとうの日本を知らぬのだ。日本の不思議な底力を知らぬのだ。

嘗て北海道の開拓が今のやうでなかつた時代の石狩川を見ると、あの廣い平野を勝手氣儘に流れ、羊腸曲折、その上に到るところに沮洳地を持ち、至るところにかつて流れた跡をその儘に殘してゐた。それで一旦大洪水となつても、石狩川は驚くことなくその溢れる水をこの沮洳地や、舊河川に流れ込ませて、餘裕綽々、今のやうな氾濫の慘害を流域に與へなかつた。それが開拓の進むに從ひ、河川改修とか何とか言つて、その水路を直線にし、沮洳地や舊河川を埋めてしまつたので、一旦洪水となると忽ち大氾濫を起し、最近十年の統計による最大高水量に基くなどと言ふ都合のよい、えらさうな堤防を突破して、百年に一度と言ふやうな出水量を示し、人間の仕事を嘲笑する。

つまり、過去に切りつめ、近眼的な人間の考へで不測の自然を勝手に決定することが、餘裕を失はせ、底力をなくさせた結果だ。

人間に盲腸がある。近來は不要の邪魔物の如く考へられ、取扱はれてゐるが、或はこの河川の沮洳地、舊河川と言つた役割をしてゐるのではないか。いざと言ふ時、頑張りをさせるのに役立つてゐるのではないか。私の知つてゐる某中將が、師團長の時に私に談つた。盲腸を除去したが、平時別にその影響を感じない。しかしなんだか體に無理が利かぬやうな氣がすると。つまり頑張る底力が出ぬと言ふのだ。かうなると盲腸の切斷は、河川の改修で、あの堤防に信頼し、水路を直線にするやうなものかも知れぬ。何か特別の時に腸に餘裕ができぬため底力を失ひ、頑張りが利かず、斃れるに至ることになる。

どうも理窟や、單なる經濟學的な見地の生活は、かうした盲腸的な存在を否定し易い。日本の農家の生活を見る時、この事はよく解る。家でも、食物でも、焚物でも、無いと言つても、どうにかなる。野に山に畑に、盲腸的なものがあり、平時は無駄の如くに放置されるが、いざと言ふ時に役立つ。だから饑餓に堪へる。これが町住ひとなると、さうは行かぬ。米がない、野菜がない、焚物がないとなると、融通も胡麻化しも利かぬ。一寸家が壞れても修理材料も無い。無いとなると全く無い。金などあつても喰ふわけにも着るわけ

にもいかぬ。すなはち盲腸的な存在を缺いて底力が無い。

だがこの町住ひ、殊にインテリの生活など最も合理的で、計畫生活で、大いに經濟學的なものとされてゐる。それは農家生活とはおそらく較べものにはならぬであらう。だが底力が無いことは確かだ。

英國があれだけの持久戰をなし得るのは國に底力があるからで、日本の素封家が、潰れさうで潰れぬ。立木を賣り、山野を賣り、田畑を賣り、持物を賣り、時には土藏を賣つても持ちこたへる。賣り物がそこらに何かしらある。それで、持ちこたへる。

蔣介石にしてもさうだ。殊に支那人の生活程度は低い。物資も費用も左程いらぬ。これも持ちこたへが利く。

こゝに然し歐米と、日本とかうしたことで一般的に個人の生活を比較したらどうであらう。家が壞れた場合、あの關東大震火災後の如く、あんな小屋やバラックなら建て易く、間に合はせ易い。着物は、これは殊に盲腸的な存在が豐富だ。まづ各戸の箪笥の中を考へ

てもそれを着つぶすことになれば、何年かは持ち應へ得よう。こんな盲腸は外國にあるだらうか。

問題の食物だ。五年戰ひをして、今のやうな贅澤な、豐富に物を持ち得てゐることは獨逸などでは、考へ得ぬことである。米が無い、麥が無いと言つても、年々できるものであり、まだ米や麥の作れる田畑に生活必需品でない高級の果物や、野菜などを平氣で作つてゐ、國家も平氣で作らせてゐる。困つて來たらこんな果樹は引き拔いて米麥を作らせればよい。それに、日本は海を持つてゐる。こゝに魚類がある。これ程の魚類を食糧に供し得る國が他にどれだけあるか。それ故食糧にも他の國ほど困らぬ。金！　金の問題などは苦にするに及ばぬと思ふ。大日本帝國、この國を國民が信賴すれば不兌換紙幣で結構である。外國から物を買はぬやうにし、止むを得ぬ場合は物物交換をやる。さうすれば國內の流通貨幣は證券でよい。國家が潰れず、搖がぬ以上、拾圓と言へば拾圓なのだ。

だから日本ほど底力のある國は他にないと言つてよい。これ以上は、國民の精神の金剛不壞であることだ。精神が碎けぬなら、日本は絕對に碎けぬ。戰爭など何年續いても、そ

の積りになれば、續け方にも戰ひ方にも手はあると思ふ。

この底力が日本にあることなど、恐らく英米では理解できまい。理解したら英米も蔣介石もいい加減に斷念する筈である。

われわれは斷乎邁進すると共に大いにこの底力を發揮し、この底力の無限なことを相手に知らすべきである。日本國民の從來の生活に觀念遊戯があり、無駄があつたことは事實である。今はしかし、これを底力として生かす、生活の革新であり、それが時局乘り切りの力となるなど頗る面白いと思ふ。

衣食住に遊ぶ日本

五年を國戰へり獨力もて戰ひ貫けり讃へざらめや

資材が乏しい、糧食が不足だといふ聲を聞き、また親しく日常の生活はそんなことを感じさせられるが、靜かに考へて見る時、私は、この五年にわたる支那事變を獨立で處理して來た、日本の力を讃嘆せざるを得ない氣持になる。實際よくやつて來たと思ふ。過去の歐洲大戰當時のドイツの狀況に比較したら、現下の日本はまだまだ、餘裕綽々とまで行かぬとも、確かに惠まれてゐると思ふ。これは私の所感のみでなく、過日會つたドイツ人の述懐でもある。

彼は日本に來るまでは、恰も彼が經驗した大戰當時のドイツの如く、日本は物資の缺乏